

黒田大明神原遺跡Ⅲ

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

黒田大明神原遺跡Ⅲ

2000年3月

長野県飯田市教育委員会

例



1. 本書は送電線鉄塔ならびに工事用道路建設に先だって実施された、飯田市上郷黒田 黒田大明神原遺跡の緊急発掘調査報告書である。
2. 調査は、中部電力株式会社飯田支店から委託を受け、飯田市教育委員会が実施した。
3. 調査は、平成10年度に現地作業を行い、平成11年度に整理作業及び報告書作成作業を行った。
4. 調査実施にあたり、基準点測量・空中写真撮影を株式会社ジャステックに委託した。
5. 本遺跡は今回を含め4次調査されているが、2次調査地点及び今時調査地点は1次・3次地点と地形的な特徴から別遺跡と推定される。従って遺構番号は2次調査（飯田市教委 1997）からの番号を用いている。
6. 発掘作業及び整理作業にあたり、遺跡略号をKDIMとして使用し、遺跡の中心地番である2542-19を略号に続けて付した。
7. 本報告書では以下の遺跡略号を使用している。竪穴住居址・竪穴-SB、集石・配石-SI、土坑-SK、また、建物址等に関わらないピットは各グリット毎番号を付している。
8. 土層の色調・土性は、『新版標準土色帳』1996版の表示に基づいて示した。
9. 本書に関わる図面の整理は、調査員・整理作業員の協力により下平博行が行った。
10. 本文の執筆と編集および遺構写真は下平が、写真図版8についてはミニチュア土器以外を杉本和樹氏が撮影し、残りの遺物は全て下平が撮影した。
11. 本書の遺構図の中に記した数字は、検出面・床面からそれぞれの穴の深さ（単位cm）表している。
12. 本書に関連した出土遺物及び図面写真類は飯田市教育委員会が管理し、飯田市考古資料館に保管している。

目次

本文目次

例言		(1) 弥生時代の竪穴住居址…………… 9
目次		(2) 縄文時代の土坑…………… 10
		(3) 縄文時代の集石…………… 11
		(4) その他の遺構…………… 13
		(5) 遺構外出土遺物…………… 13
第I章 経過…………… 1	第IV章 総括…………… 24	
第1節 調査に至るまでの経過…………… 1	第1節 縄文土器の概要…………… 24	
第2節 調査の経過…………… 1	第2節 SB19出土	
第3節 調査組織…………… 1	磨製石鏃未製品について…………… 26	
第II章 遺跡の環境…………… 5	第3節 縄文時代の遺構について…………… 26	
第1節 自然環境…………… 5		
第2節 歴史環境…………… 7		
第III章 調査結果…………… 9	写真図版	
第1節 調査区の設定…………… 9	報告書抄録	
第2節 基本層序…………… 9		
第3節 遺構と遺物…………… 9		

挿図目次

挿図1 遺跡位置図…………… 2	挿図17 SK34・遺構外出土土器…………… 21
挿図2 調査区全体図…………… 4	挿図18 SB・SK出土石器…………… 22
挿図3 調査区周辺地形図…………… 5	挿図19 SK・遺構外出土石器…………… 23
挿図4 調査位置及び周辺の遺跡…………… 6	
挿図5 基準メッシュ図…………… 8	写真図版目次
挿図6 基本層序…………… 9	図版1 調査前・調査区全景・SB01…………… 29
挿図7 SB19…………… 9	図版2 SI32～34…………… 30
挿図8 SB19出土土器…………… 10	図版3 SK27・34・34遺物出土状況…………… 31
挿図9 SK27～34…………… 12	図版4 調査区全景1・2…………… 32
挿図10 SI32～37…………… 14	図版5 作業風景…………… 33
挿図11 周辺ピット図(1)…………… 15	図版6 SB19・SK27・28出土土器…………… 34
挿図12 周辺ピット図(2)…………… 16	図版7 SK29・31出土土器…………… 35
挿図13 周辺ピット図(3)…………… 17	図版8 SK34出土土器…………… 36
挿図14 SK27～29出土土器…………… 18	図版9 SK33・遺構外出土土器…………… 37
挿図15 SK31～33出土土器…………… 19	図版10 SB19出土石器…………… 38
挿図16 SK34出土土器…………… 20	図版11 SK・遺構外出土石器…………… 39

第I章 経 過

第1節 調査に至るまでの経過

平成10年11月18日付で、長野県飯田市吾妻町100番地 中部電力株式会社飯田支店長 相馬保之より、飯田市上郷黒田2542-19の開発に伴う、埋蔵文化財発掘の届出が提出された。計画は送電線建設とそれに伴う工事用道路を建設するもので、当該地は埋蔵文化財包蔵地黒田大明神原遺跡にかかる。東側隣接地では、平成7年、県道飯島飯田線バイパス建設に先立つ発掘調査が行われており、飯伊地区では類例の少ない縄文時代早期の住居址をはじめ、縄文時代前期から後期にかけ各種の遺構・遺物が確認されている（飯田市教委 1997）。また、平成8年には南側隣接地で引き続き県道バイパス建設に先立つ発掘調査が実施され、縄文時代中期の大規模な集落が確認された（飯田市教委 1999）。このように黒田大明神原遺跡一帯は、縄文時代を中心とする大遺跡であるため、事業主・飯田市教育委員会で協議した結果、発掘調査を実施し、完全な記録保存を図ることとなった。

第2節 調査の経過

諸協議に基づいて、平成11年2月10日、飯田市上郷黒田大明神原遺跡埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、本調査に着手した。2月25日より3月4日にかけて重機による抜根作業および表土剥ぎを行い、(株)ジャステックによる委託基準点設置作業及び作業員を入れての発掘調査を着手した。まず重機の荒れ土および抜根痕を除去し、竪穴住居址・土坑・集石炉・ピット等の遺構を検出し、順次掘り下げて精査を行った。そして全体及び個別の測量調査及び写真撮影を行い、(株)ジャステックによる委託空中写真撮影後、3月26日現地での作業を終了し、重機による埋め戻しを行った。その後、平成10年度末まで飯田市考古資料館において、現地で記録された図面・写真の基本的な整理作業を行い、概要報告の作成作業を行った。

平成11年度は、出土遺物の整理作業・報告書作成作業を行うこととなった。4月1日より飯田市考古資料館において出土遺物の水洗い・注記・接合・復元作業・遺物実測・写真撮影作業および遺構図作成・トレース作業・報告書版組などを行い、本報告書作成作業にあたった。

第3節 調査組織

(1) 調査団

調査主体者 飯田市教育委員会 教育長 小林恭之助（平成11年12月24日まで）
富田泰啓（平成11年12月25日～）
調査担当者 下平博行



挿図1 遺跡位置図

調査員 佐々木嘉和・吉川 豊（～平成10年度）・山下誠一（～平成10年度）
澁谷恵美子（平成11年度～）吉川金利・伊藤尚志・
福澤好晃・下平博行・坂井勇雄（平成11年度～）

発掘作業員 新井幸子・伊坪 節・太田沢男・岡田直人・岡田紀子・北原 裕・小平不二子
瀬古郁保・田中 薫・樋本宣子・古林登志子

整理作業員 唐沢古千代・林昭子・筒井規子・牧内八代・松下博子・三浦厚子・宮内真理子

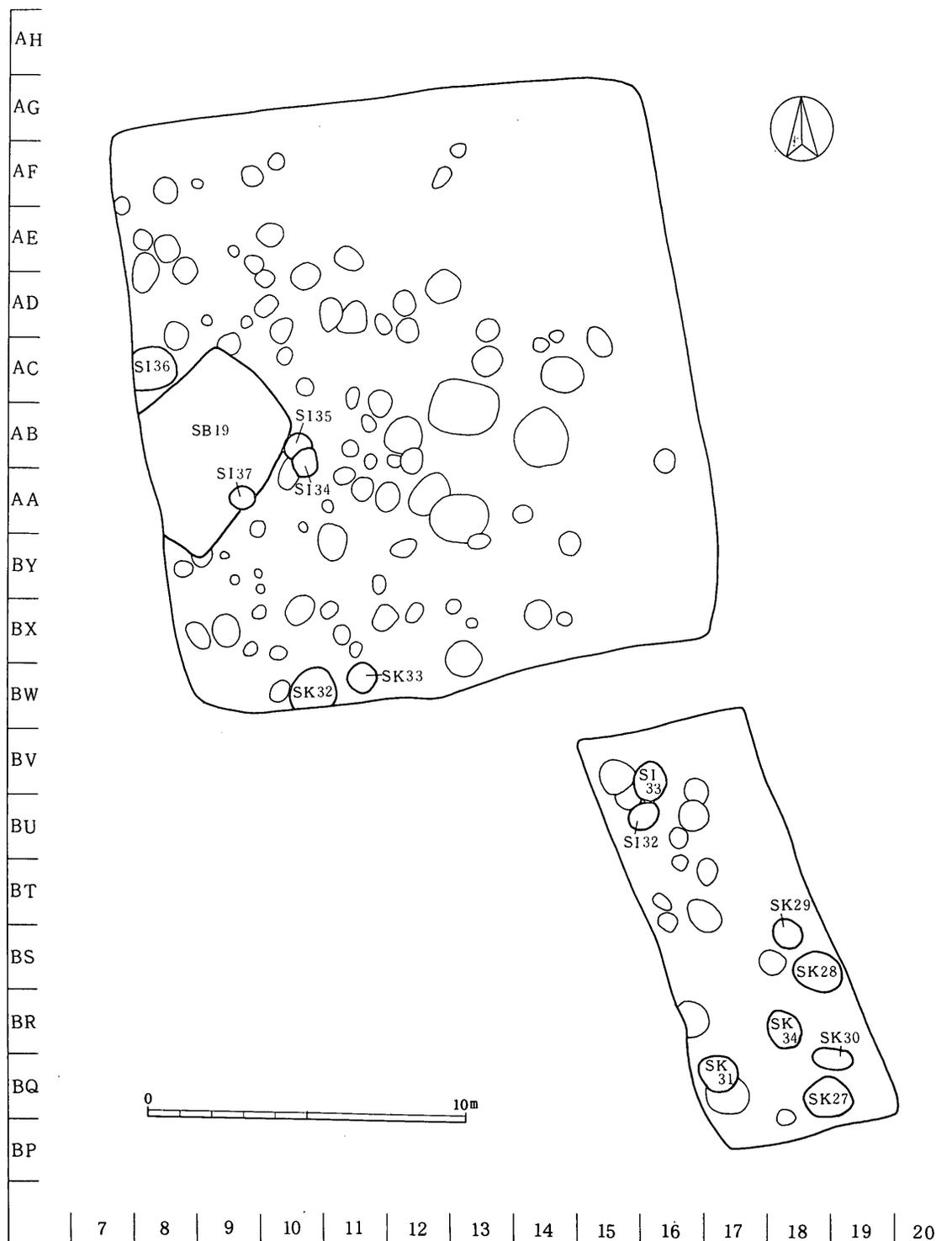
（2）指 導

長野県教育委員会文化財・生涯学習課

（3）事務局

飯田市教育委員会博物館課

小畑伊之助（博物館課長）
小林正春（博物館課埋蔵文化財係長）
吉川 豊（ 〃 埋蔵文化財係 ～平成10年度）
山下誠一（ 〃 〃 〃 ）
馬場保之（ 〃 〃 ）
澁谷恵美子（ 〃 〃 平成11年度～）
吉川金利（ 〃 〃 ）
伊藤尚志（ 〃 〃 ）
福澤好晃（ 〃 〃 ）
下平博行（ 〃 〃 ）
坂井勇雄（ 〃 〃 平成11年度～）
牧内 功（ 〃 庶務係 ）
松山登代子（ 〃 〃 平成11年度～）



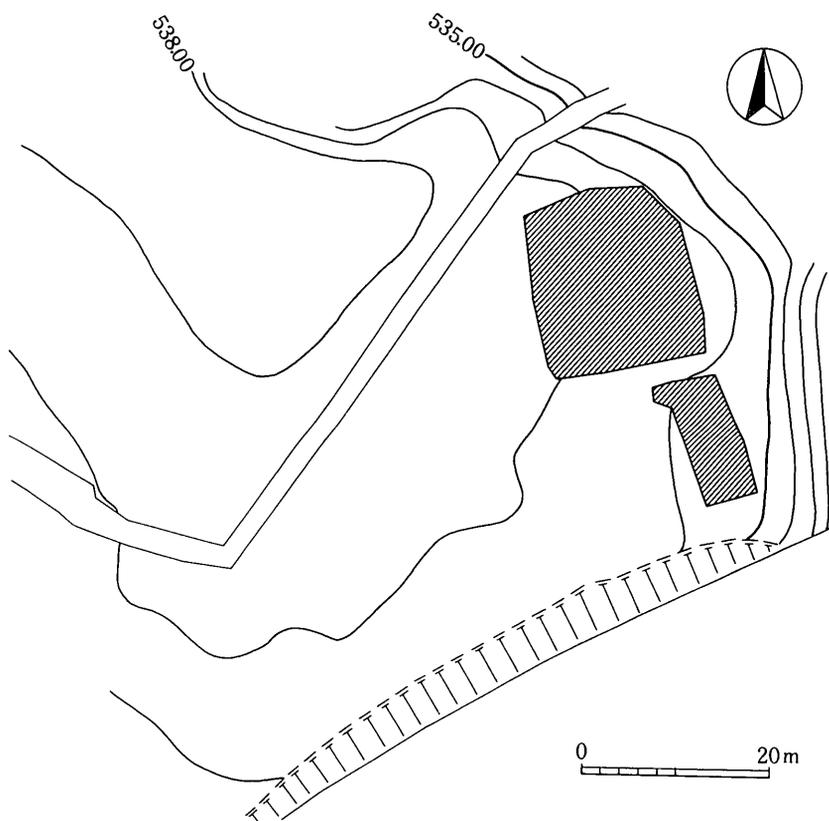
挿図2 調査区全体図

第II章 遺跡の環境

第1節 自然環境（挿図1・3）

黒田大明神原遺跡の所在する飯田市上郷地区は、長野県の南端を南北に併走する赤石山脈・木曾山脈の間に広がる飯田盆地のほぼ中央に位置する。北西に野底山・鷹巣山があり、そこを源とする野底川・土曾川が南流し、天竜川と飯田松川に注いでいる。この両河川に挟まれた面積約26平方キロメートルで、東西に長く緩やかに傾斜した地域である。一帯は天竜川とその支流によって形成された河岸段丘や扇状地上に、原始から現在に至るまで人々の生活舞台が展開している。

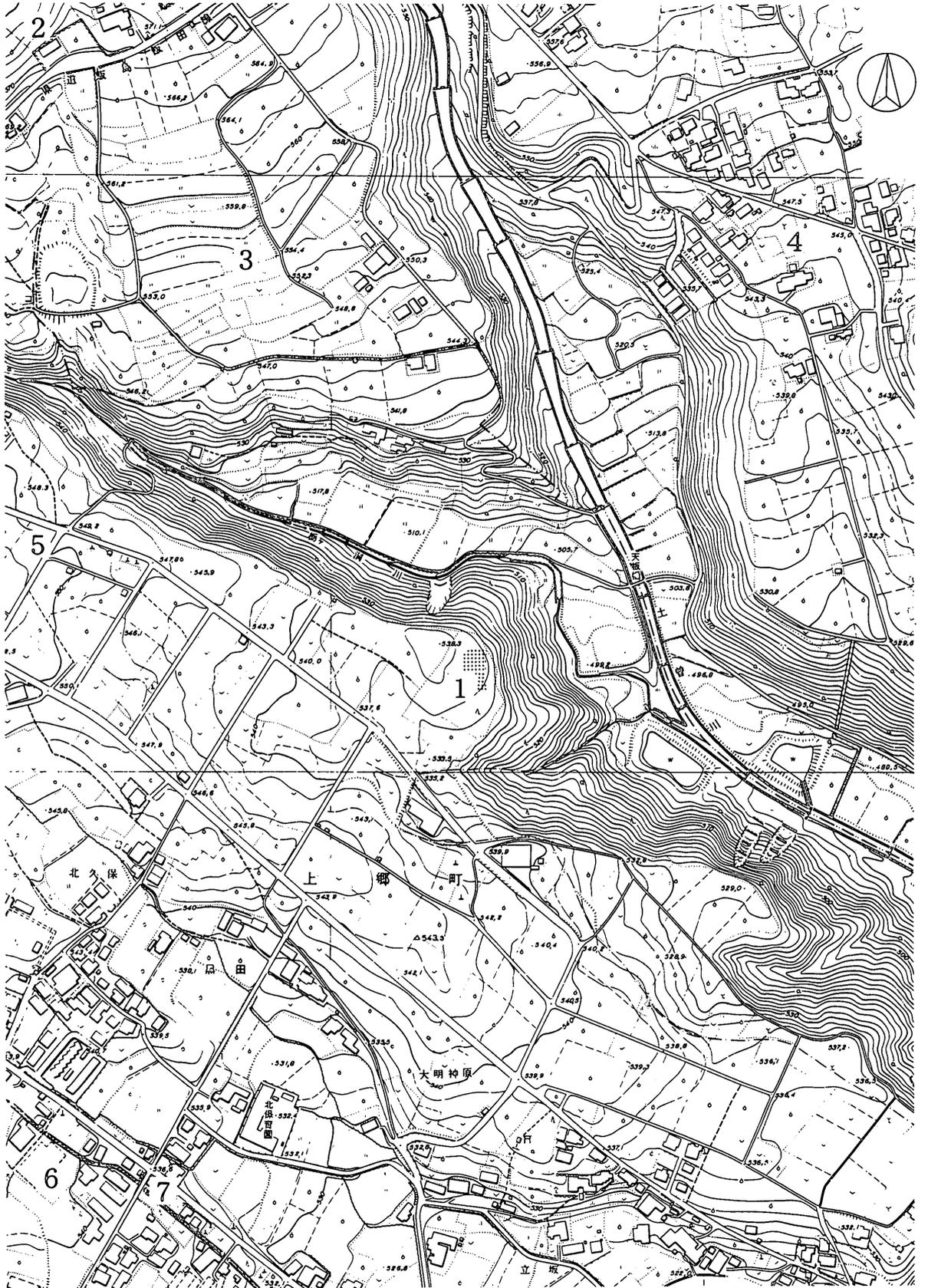
『下伊那の地質解説』によれば、伊那谷の段丘は火山灰土の堆積を基準として高位面・高位段丘・中位段丘・低位段丘Ⅰ・Ⅱに大きく編年されている。上郷地区の地形の特徴として、中央部を南北に横断する大段丘がありこれを境として俗に「上段うわだん」と呼称される洪積土壌地帯の中位段丘及び低位段丘Ⅰと、「下段 しただん」と呼ばれる沖積土壌面の低位段丘Ⅱが見られ、その段丘崖の比高は約50mを測る。中位段丘・低位段丘Ⅰ一帯は、天竜川の現河床面海拔398mとの比高差200から80mを測り、野底山山麓から南



挿図3 調査区周辺地形図

東方向に緩やかに傾斜する広大な地域を占めており、野底山による新規扇状地が発達し、総体とすれば乾燥した台地をなしている。中位段丘・低位段丘Ⅰ地帯は三大別でき、南東側に本遺跡のある中位段丘下殿岡面、北東側に中位段丘面八幡原面があり、いずれも細長く小高い丘陵地形を呈している。この間の地帯が低位段丘Ⅰ伊久間原面で、2×1kmの広い範囲である。本遺跡は中位段丘八幡原面の海拔530～550mにあり、全体には南東に緩い傾斜を持つもののほぼ平坦な台地である。北側は、座光寺地区との境となる土曾川の浸食谷が口を広げている。南側は湿地を挟んで原の城遺跡のある台地が存在する。

今時調査地点南西側には湿地が見られ、比高差10mほどで平成8年度調査地点へと続いている。こうした点から段丘面上に幾筋もの畝状の微地形が形成されていたと考えられる。今時調査地点もこうした微地形を利用して集落が営まれていたと推定される。



1. 黒田大明神原遺跡 2. 宮崎上遺跡 3. 宮崎下遺跡 4. 松林遺跡
 5. 黒田社宮司原遺跡 6. ツルサン遺跡 7. 垣外遺跡

0 250m

挿図4 調査位置及び周辺の遺跡

第2節 歴史環境

上郷地区最古の遺跡は、姫宮遺跡・柏原遺跡であり、縄文時代草創期の土器・石器が確認されている。縄文時代早期になると八王子遺跡・西浦遺跡・黒田大明神原遺跡等で遺物が出土しており、西浦・黒田大明神原遺跡では押型文期の住居址が確認されている。前期にはいと遺跡数は増加し、上段の中位段丘を中心に遺構・遺物が出土している。しかしながら低位段丘面でも、別府中島遺跡・矢崎遺跡で、諸磯期の住居址が確認されており、天竜川の氾濫源近くまで生活域が広がったことを示唆している。また、今時調査地点東側では、前期前葉中越式期の集落と共に、大型建物址も確認されており、拠点的な集落も形成されていたと推定される。

縄文時代中期になると調査地点南側で拠点的な大集落が形成されているほか、見城恒外遺跡・平畑遺跡・栗屋元遺跡・増田遺跡・垣外遺跡など地区全域にわたり遺跡数が増加する。

一方、縄文時代後期にはいと遺跡数は極端に減少し、日影林遺跡で遺物が出土するものの、明確な遺構は確認されていない。また、縄文晩期も状況は変わらず、遺跡数は少ないものの、下段の矢崎遺跡で東海系の条痕文系土器・在地系の氷式が出土しており、弥生時代への移行期の遺跡として注目されている。また、今時調査地点の東側では、氷式の甕が埋設された甕棺墓が確認されている。

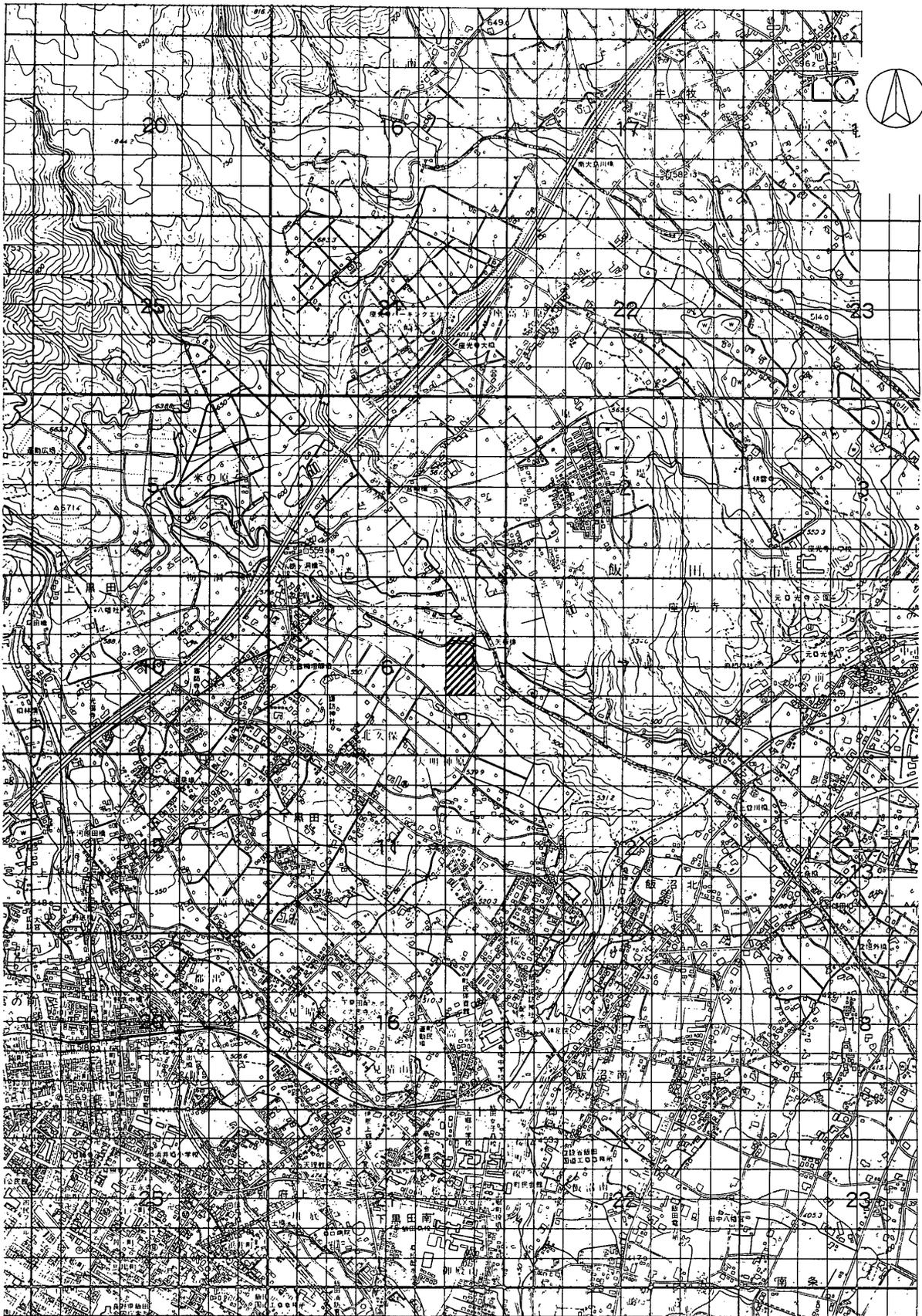
弥生時代にはいと、水稻栽培を経済の基盤とする新しい文化が形成され、弥生時代後期には、下段で丹保遺跡・上段では垣外遺跡・高松原遺跡等大規模な集落が形成される。しかし、上段の遺跡では集落の規模が小さい例が多く、住居址が疎に分布し、遺物の出土量も極めて少ない。こうした事態は経済基盤となる稲作農耕の形態差から生まれると推定されている。

古墳時代の上郷地区は、古墳36基が確認されており、そのほとんどが別府の低位段丘面に位置している。平成8年度、国道153号バイパス建設工事に先立ち、溝口の塚古墳の発掘調査が行われた。溝口の塚古墳は、約50mの前方後円墳で、未盗掘の竪穴式石室が調査された。石室内からは三角板鋸止短甲・横刃板鋸止短甲・衝角付冑・鉾・刀剣類などの豊富な武具が確認された。付近には円墳・方形周溝墓・馬埋葬施設などの弥生時代後期から古墳時代にかけての墳墓群が多数調査されている。

奈良・平安時代になると堂垣外遺跡に代表され、古代伊那郡衙とされる恒川遺跡の工房址と推定される住居址群や掘立柱建物址等が確認されている。住居址内からは轡・鞆の羽口・漆痕の見られる坏が出土しており、この点から堂垣外遺跡は郡衙に付属する官人・工人の集落である可能性が高いと言える。

中世になると飯沼城・古城・見晴山城など4箇所の城跡が確認されている。いずれの城跡も戦国時代に築造されたものと推定される。この中で、飯沼城は京都醍醐寺理性院の厳助僧正の『信州下向記』（天文2年 1533年）に現れ、厳助僧正が文永寺を訪れた際、飯沼城主坂西伊予守弟民部小輔の接待を受けたとされている。主郭には現在でも高さ3mほどの壮大な土塁が巡るものの、周辺は開発が進み、掘等の諸施設が破壊されつつある。

近世には、伊那谷各地で人形芝居が流行し、上郷地区でも下黒田諏訪神社で現代まで引き続き上演されている人形芝居がある。下黒田諏訪神社の人形芝居専用の舞台は、国の重要民俗有形文化財に指定されており、住民の精神活動の拠り所として現在でも重要な位置を占めている。上黒田では一里塚があったとされており、県道飯島飯田線が旧春日街道に当たると推定される。こうした歴史的背景のある上郷地区は、文化・文化財が良好に伝承された地域の一つといえよう。



挿図5 基準メッシュ図

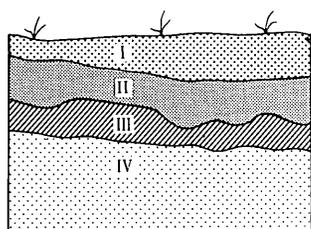
第III章 調査結果

第1節 調査区の設定 (挿図5)

調査区の設定は、飯田市埋蔵文化財基準メッシュ図 (以下、基準メッシュ図と略す。) に基づいて、株式会社ジャステックに委託した (設定方法については、飯田市教育委員会 1998 『美女遺跡』他参照)。今次調査地点は、LC-75 6-23、6-31内に位置する。

第2節 基本層序 (挿図6)

A 536.50



挿図6 基本層序

A'

BV-15グリットで基本層序確認のための調査区をもうけた。

第I層	5 YR3/1	黒褐色土	HC
第II層	5 YR4/2	灰褐色土	HC 遺物包含層
第III層	10 YR6/6	明黄褐色土	ソフトローム
第IV層	10 YR5/6	黄褐色土	ハードローム

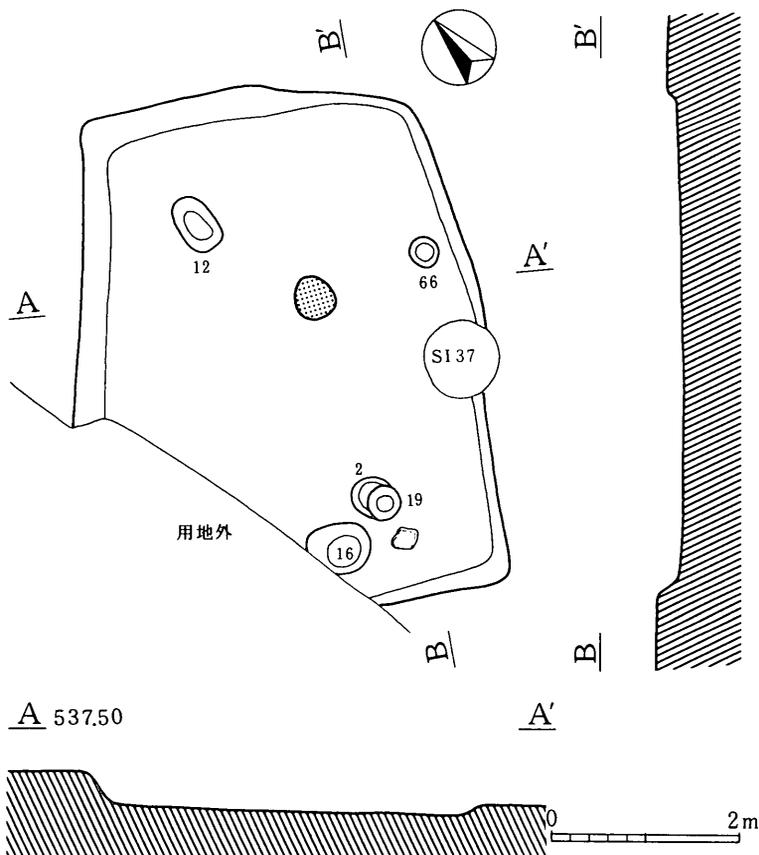
第3節 遺構と遺物

(1) 弥生時代の住居址

① SB19 (挿図7・8・17)

I区西側AB9グリットを中心に検出された。住居址南側隅が調査区外に延びる。縄文時代の集石炉のSI35・37と切り合い関係にある。

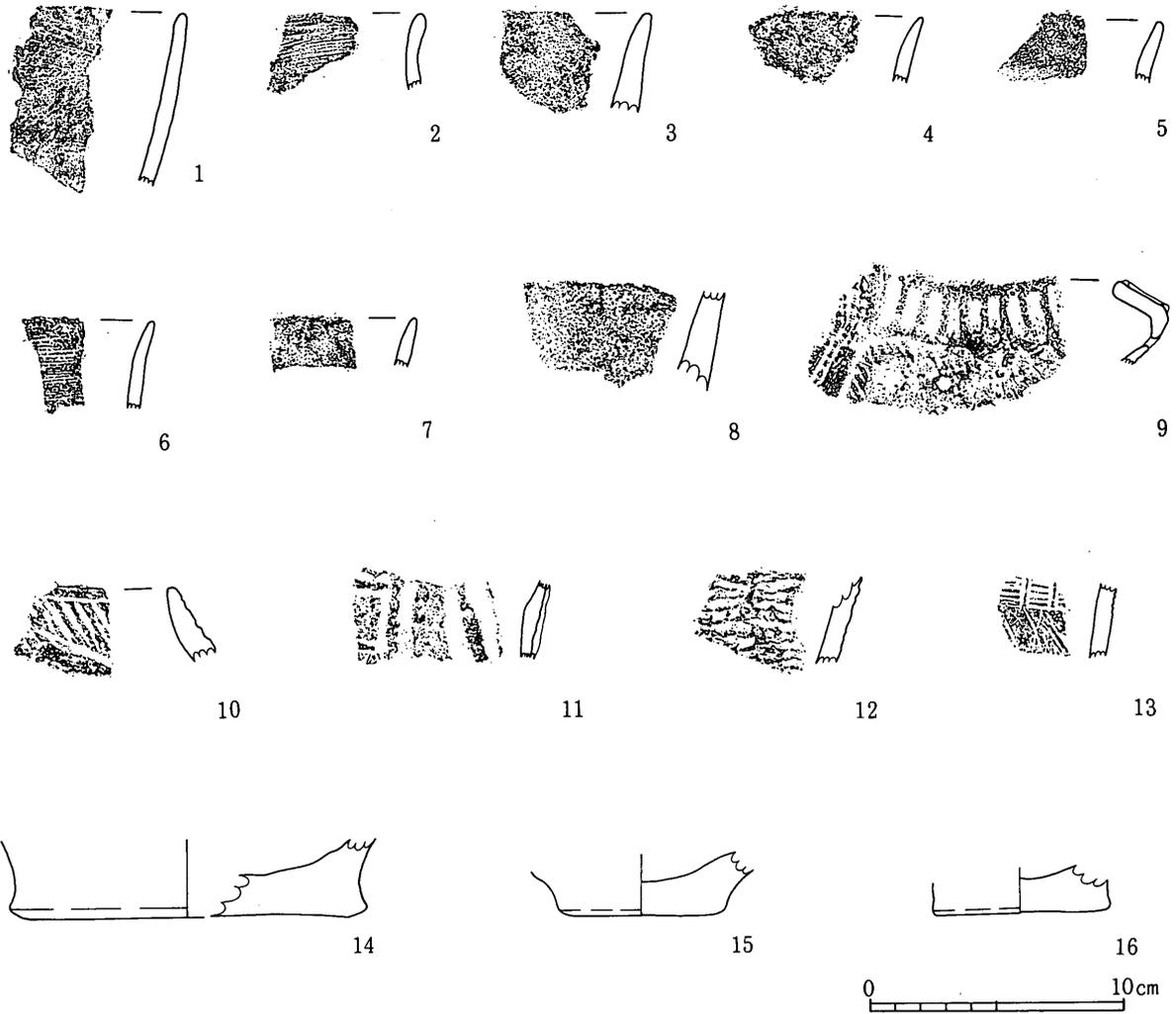
住居址はN-40°-Eを主軸とし、5.5×4.5mの不整形な隅丸方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、検出面から深さ約40cm掘り込まれている。床はほぼ全面に貼り床が施され、住居址北壁寄りに地床炉がある。住居址内4つのピットが検出されたもののいずれも柱穴としては不明瞭である。出土遺物は極めて少なく、覆土上層からは縄文時代中期後半の土器が混入してみられ、下層からは弥生時代と考えられる土器片が少量出土した。南側床面からは磨製石鏃末製品が6個まとまって出土し、南側隅に緑色岩製の砥石が確認された。出土遺物から弥生時代の住居址と判断する。



挿図7 SB19

A 537.50

A'



挿図8 SB19出土土器

(2) 縄文時代の土坑

今時調査地点からは総数8基の土坑(SK)が検出されている。遺物は、土坑内からは同一個体の土器片がまとまって出土する例、遺物量は多いものの接合する土器が少ない例が見られ、ほとんどが土坑底面に近い位置で出土している。

①SK27 (挿図9)

南側調査区BQ-19グリットを中心に確認された。長径150cm・短径120cm・深さ62cmを測る。平面形は不整形を呈し、断面は逆台形になる。遺物の大半は底面近くに見られ、破片が多い。

出土遺物には縄文時代前期後葉から中期初頭の土器(挿図14)がみられる。

②SK28 (挿図9)

南側調査区BS-18グリットを中心に確認された。長径140cm・短径120cm・深さ86cmを測る。平面形は不整形で、断面は逆台形となる。遺物は底面近くからまとまって出土している。

出土遺物は縄文時代前期後葉から中期初頭の土器を中心に、縄文時代早期の押型文土器も混在して見られる。(挿図14)

③SK29 (挿図9)

南側調査区BS-18グリットを中心に確認された。長径98cm・短径80cm・深さ38cmを測る。平面形

は楕円形を呈し、断面は逆台形となる。遺物は底面近くより出土している。

出土遺物には縄文時代前期後葉の土器が少量見られる（挿図14）。

④SK30（挿図9）

南側調査区BQ-19グリットを中心に確認された。長径126cm・短径62cm・深さ30cmを測る。平面形は楕円形を呈し、断面は逆台形となる。覆土上層に礫が見られることから配石もしくは集石の可能性もある。遺物は覆土中から散漫に出土した。

⑤SK31（挿図9）

南側調査区BQ-17グリットを中心に確認された。長径134cm・短径114cm・深さ134cmを測る。平面形はほぼ円形を呈する。SK底面東側には柱痕状の落ち込みが見られる。遺物の多くは柱痕状の落ち込み内部から出土している。また、覆土中からは炭化物が多く検出された。形態上の特徴から、平成7年度調査次に確認された縄文時代前期と推定される大型建物址の柱穴に類似している。

出土遺物には縄文時代前期後葉から中期初頭の土器が出土している。

⑥SK32（挿図9）

北側調査区BW-10グリットを中心に確認され、一部用地外にのびる。長径150cm・短径126cm・深さ66cmを測る。平面形は不整形を呈し、断面は台形を呈する。覆土中からは遺物量は少なく、破片が多い。また、炭化物が若干混入していた。

出土遺物には縄文時代前期後葉の関西系土器および早期の撚糸文系土器が出土している（挿図15）。

⑦SK33（挿図9）

北側調査区BW-11グリットを中心に確認された。長径100cm・短径92cm・深さ40cmを測る。平面形はほぼ円形となり、断面は台形を呈する。覆土中からは遺物量が少なく、破片が多い。

出土遺物には縄文時代中期初頭の土器が少量見られる（挿図15）。

⑧SK34（挿図9）

南側調査区BR-18グリットを中心に確認された。長径140cm・短径130cm・深さ80cmを測る。平面形はほぼ円形をとり、断面は凸状になる。覆土は4層になり、3層までには礫・炭化物が多く混入していたため、集石と判断して調査を行ったが、下部（4層）に焼土・炭化物が多量に見られ、底面近くから土器2個体・ミニチュア土器1個体が出土した。この他にも土器片が多く・焼けた黒曜石・石器など多量に出土している。遺物の出土状態から土器焼成遺構としての機能が推定される。

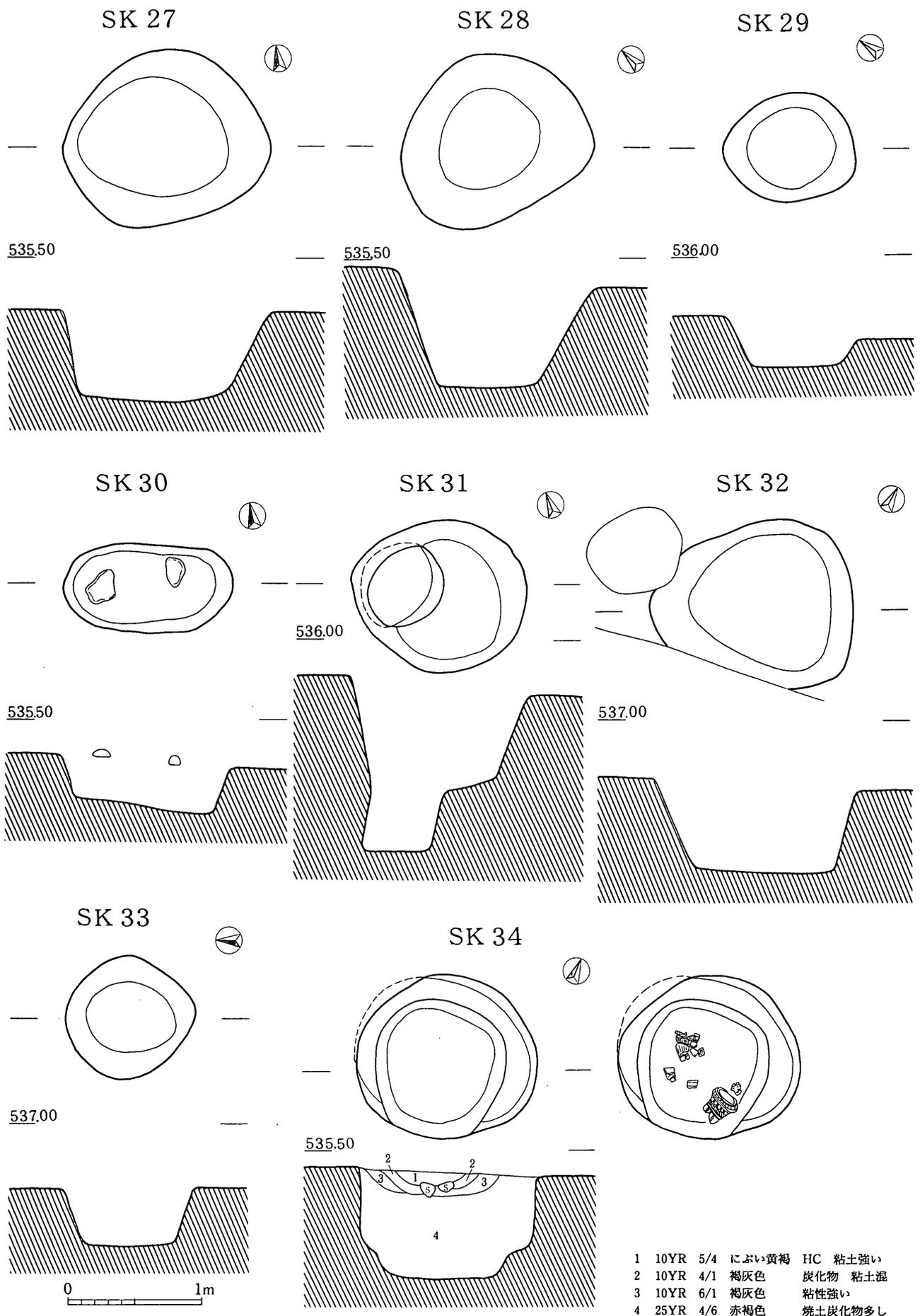
出土遺物には前述の縄文時代中期初頭の土器2個体（挿図16）、有孔鏝付土器のミニチュア（挿図17）など多量に見られる。

（3） 縄文時代の集石

今時調査地点からは総計6基の集石が確認された。いずれの集石も浅い掘り込みを持ち、周辺が赤化し、炭化物の分布も見られた。集石の分布は、南側調査区では北西角にSI32・33がまとまり、北側調査区ではSB19周辺に集中してみられた。集石からの出土遺物は細片が多く、時期が特定できる遺物は出土していない。

①SI32（挿図10）

南側調査区BU-16グリットを中心に確認された。長径30cm程度の平石を中心に10cm程度の小礫7個



- 1 10YR 5/4 にぶい黄褐 HC 粘土強い
- 2 10YR 4/1 褐灰色 炭化物 粘土混
- 3 10YR 6/1 褐灰色 粘性強い
- 4 25YR 4/6 赤褐色 焼土炭化物多し

挿図9 SK27~34

で構成される。礫の下部には長径110cm・短径80cm・深さ20cmの楕円形の掘り込みが見られ、覆土中には炭化物粒・焼土が見られた。平成7年度調査区から検出されたS I 03に形態が類似する。

②SI33 (挿図10)

南側調査区BU-16グリットを中心に確認され、SI32に接する。長径30cm程度の大型の平石4個・20cm度の礫5個から構成される。構成礫は長径120cm・短径100cm・深さ20cmのほぼ円形を呈する掘り込み内に見られ、掘り込み内部の覆土からは炭化物・焼土粒が確認された。

③SI34 (挿図10)

北側調査区AA-10グリットを中心に確認され、SI35と切り合い関係にある。長径20cm程度の礫を中心に10cm程度の小礫が周囲に配されている。集石下部には長径90cm・短径70cm・深さ20cmの不整形の掘り込みが見られ、覆土には炭化物が多量に見られた。平成7年度調査区SI03に形態が類似する。

④SI35 (挿図10)

北側調査区AA-10グリットを中心に確認され、SI34に切られる。10cm程度の小礫10個により構成され、礫はまばらに分布する。礫下部には長径80cmほどの浅い落ち込みが見られ、礫の周囲には炭化物粒が顕著に見られた。

⑤SI36 (挿図10)

北側調査区AC-8グリットを中心に確認された。一部調査区外に伸びる。長径30cm以上の大型礫の周辺に小礫が4個ほど分布するのみである。礫の下部には落ち込みが見られ、長径130cmほどの楕円形を呈すると考えられる。炭化物等は少なく集石でない可能性もある。

⑥SI37 (挿図10)

北側調査区AA-9グリットを中心に確認された。直径80cmの円形の掘り込み内に、直径10cm程度の小礫5個で構成される。覆土には炭化物が多量に混じり、一部灰のような部分も見られた。

(4) その他の遺構 (挿図11～13)

調査区内で多数のピットが検出されている。ピットについてはそれぞれをグリットピットとし、グリット内で番号をつけ処理した。出土遺物はなく、大半が樹痕と推定される。

(5) 遺構外出土遺物 (挿図17・19)

今次調査では、遺構外から各時期にわたる遺物が出土しているが、遺物量は少なく、破片のみである。挿図17-14は器面に簾状の長方形格子目文が施された押型文土器。胎土に金色雲母・長石粒を多量に含み厚手である。文様・胎土から立野式土器と考えられる。挿図17-5・6は、縄文時代早期の押型文土器で、器面全体に山形文が施文される。胎土は灰色から灰白色に近く、平成7年度調査資料に極めて類似する。挿図17-7・8・11は、一段の縄Rを用いた捺糸文土器で、胎土は前述の押型文土器に酷似する。挿図17-9・10は早期後半の条痕文系土器で、胎土に繊維を多量に含み内外面に条痕調整が見られる。挿図17-12・13は、前期の羽状縄文系土器と考えられる。挿図17-15～21は、集合沈線文を主体とする土器で、SK34から出土した土器群に類似する。挿図17-22～25は中期中葉末から後葉の土器群で出土量は極めて少ない。26～32は、弥生時代後期の土器群と考えられる。

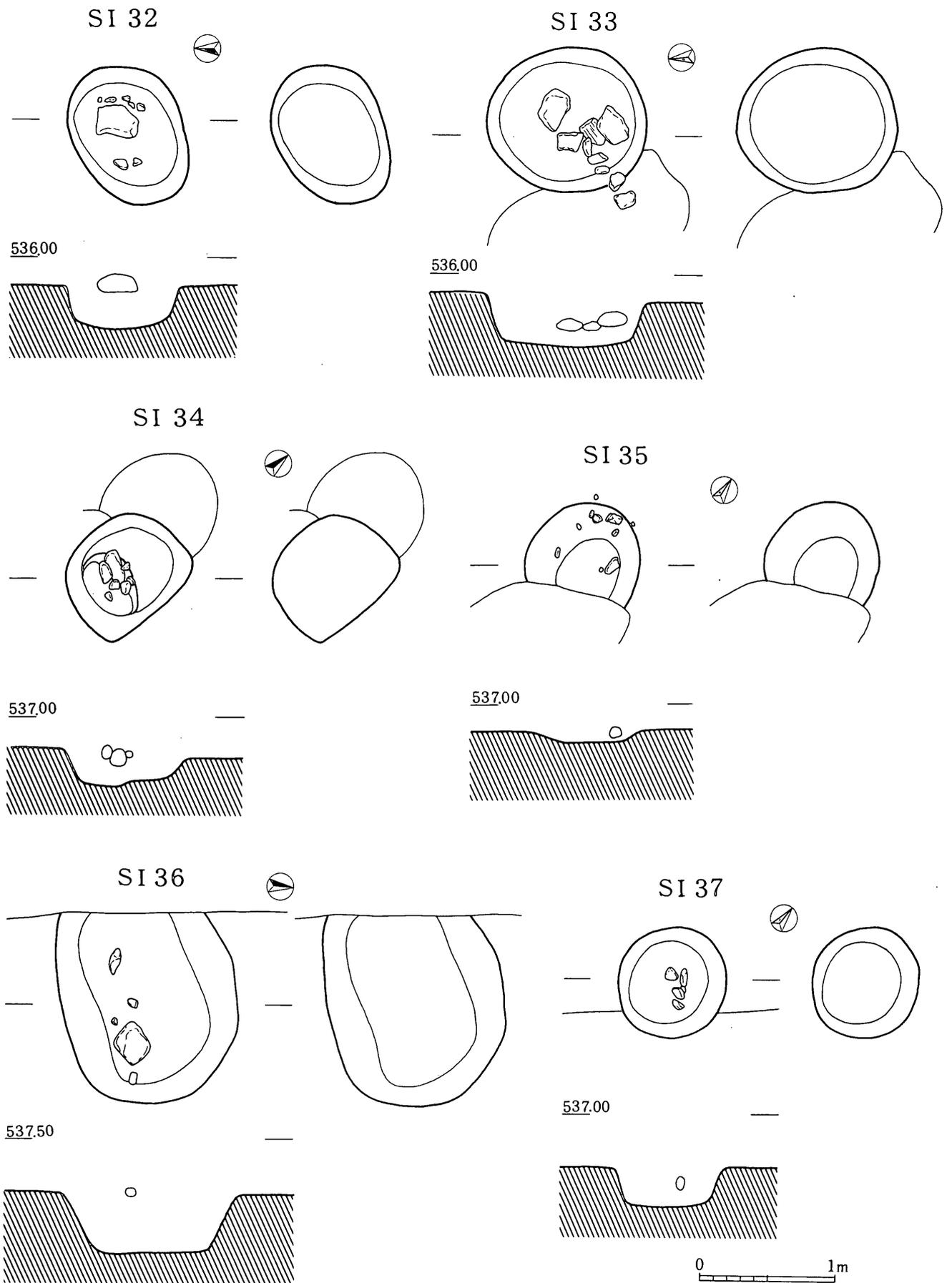
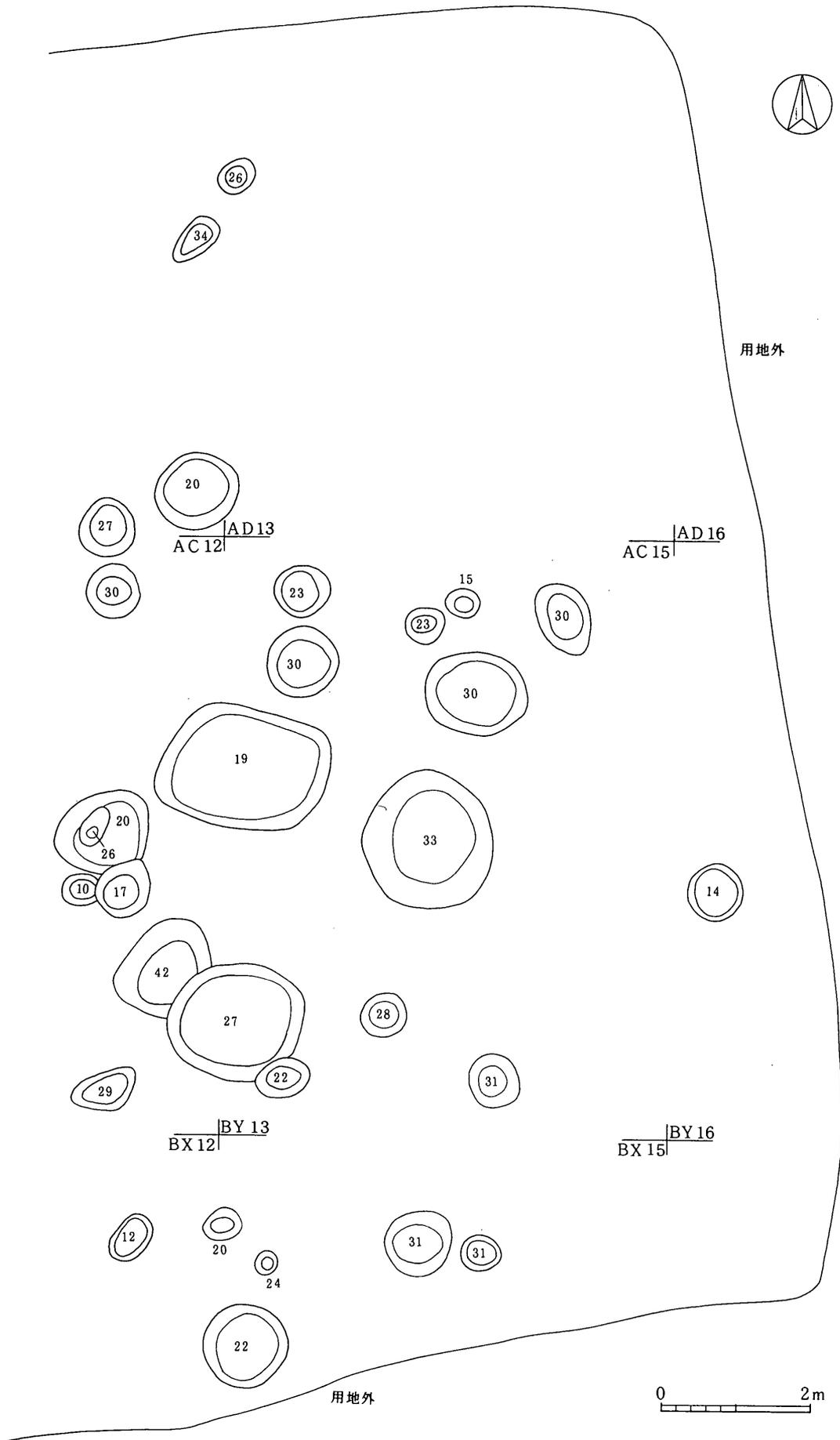
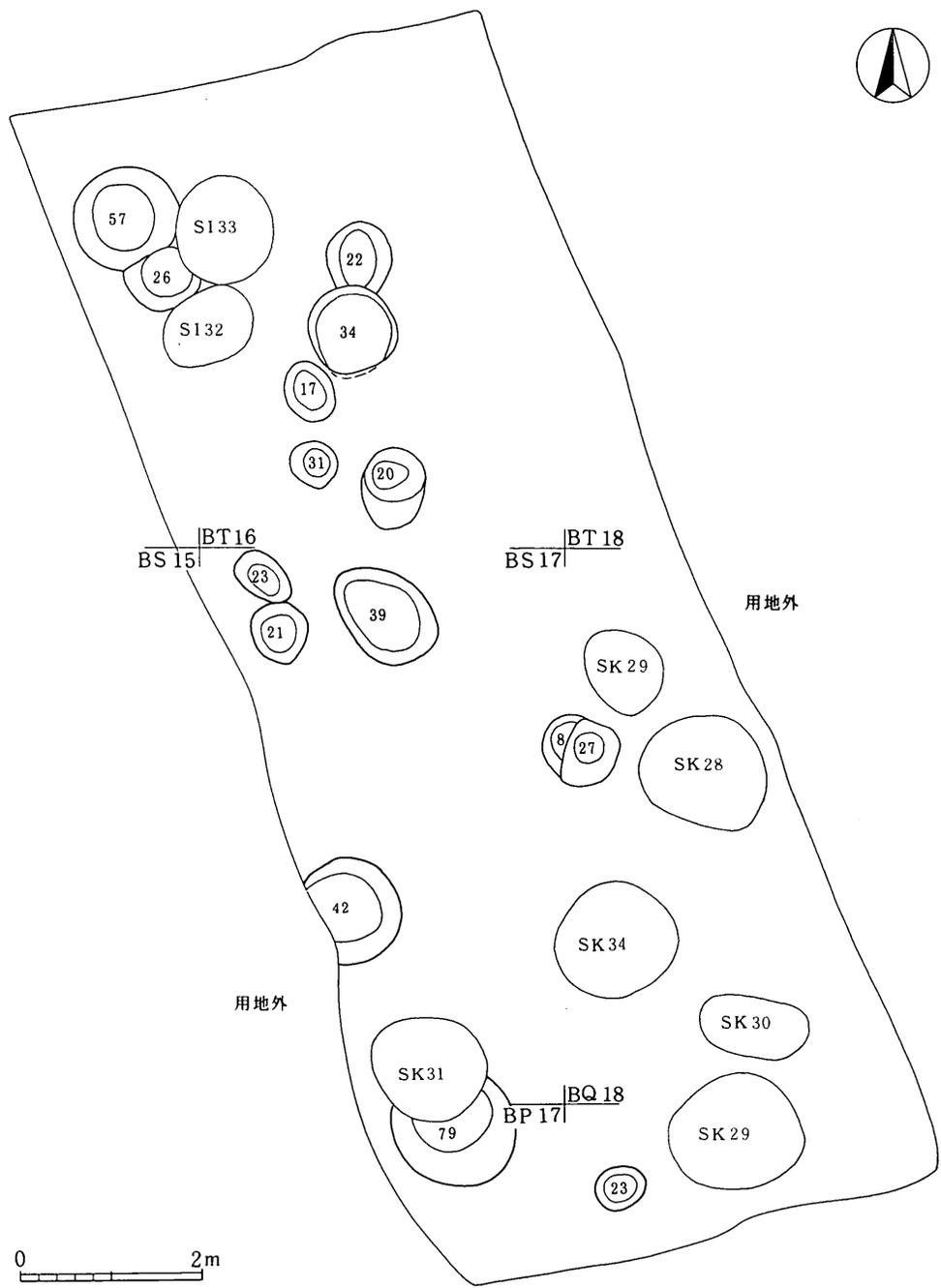


插图10 SI32~37



挿図12 周辺ピット図 (2)



挿図13 周辺ピット図 (3)

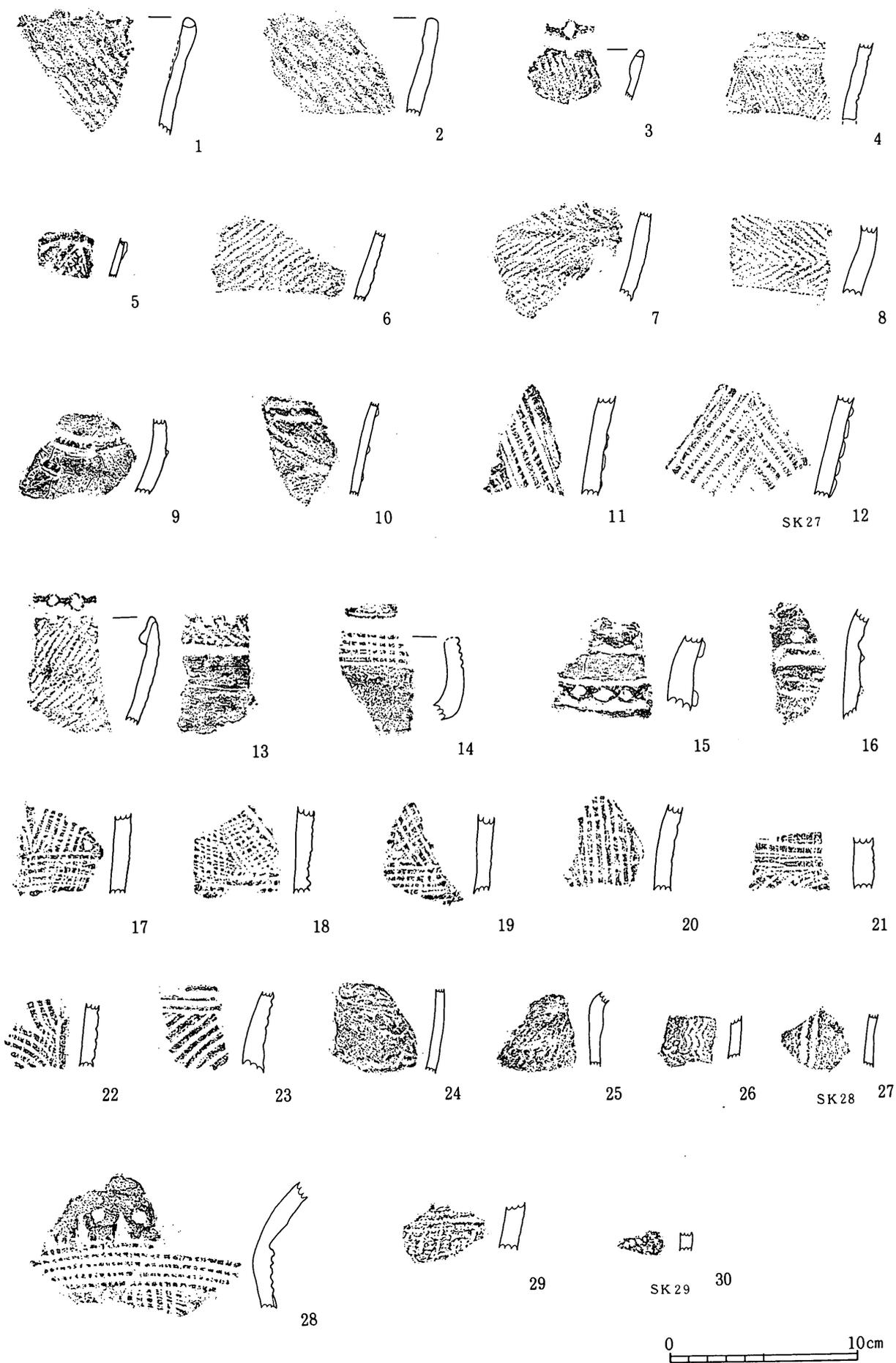


插图14 SK27~29出土土器

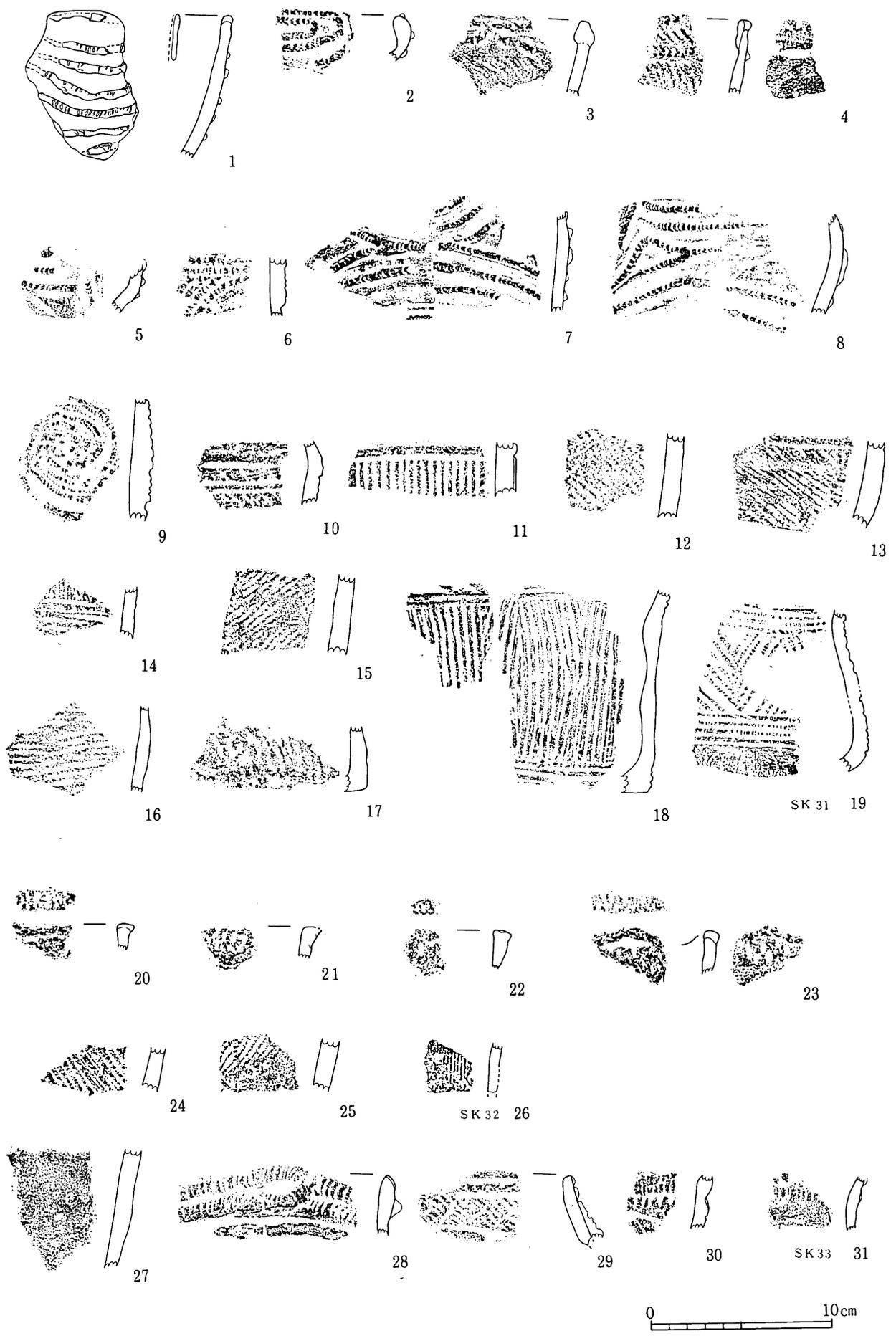


插图15 SK31~33出土土器



插图16 SK34出土土器

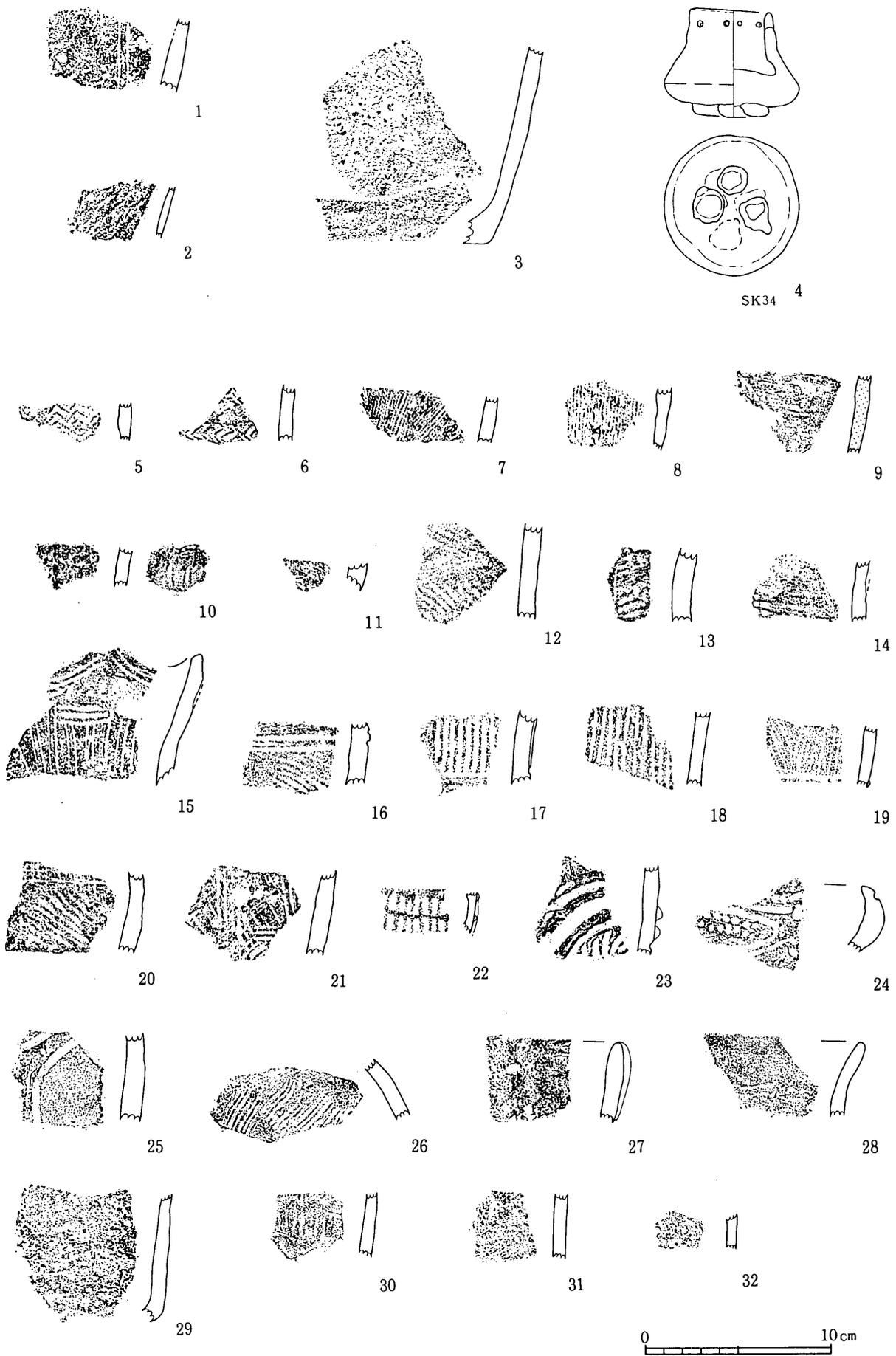


插图17 SK34·遺構外出土土器

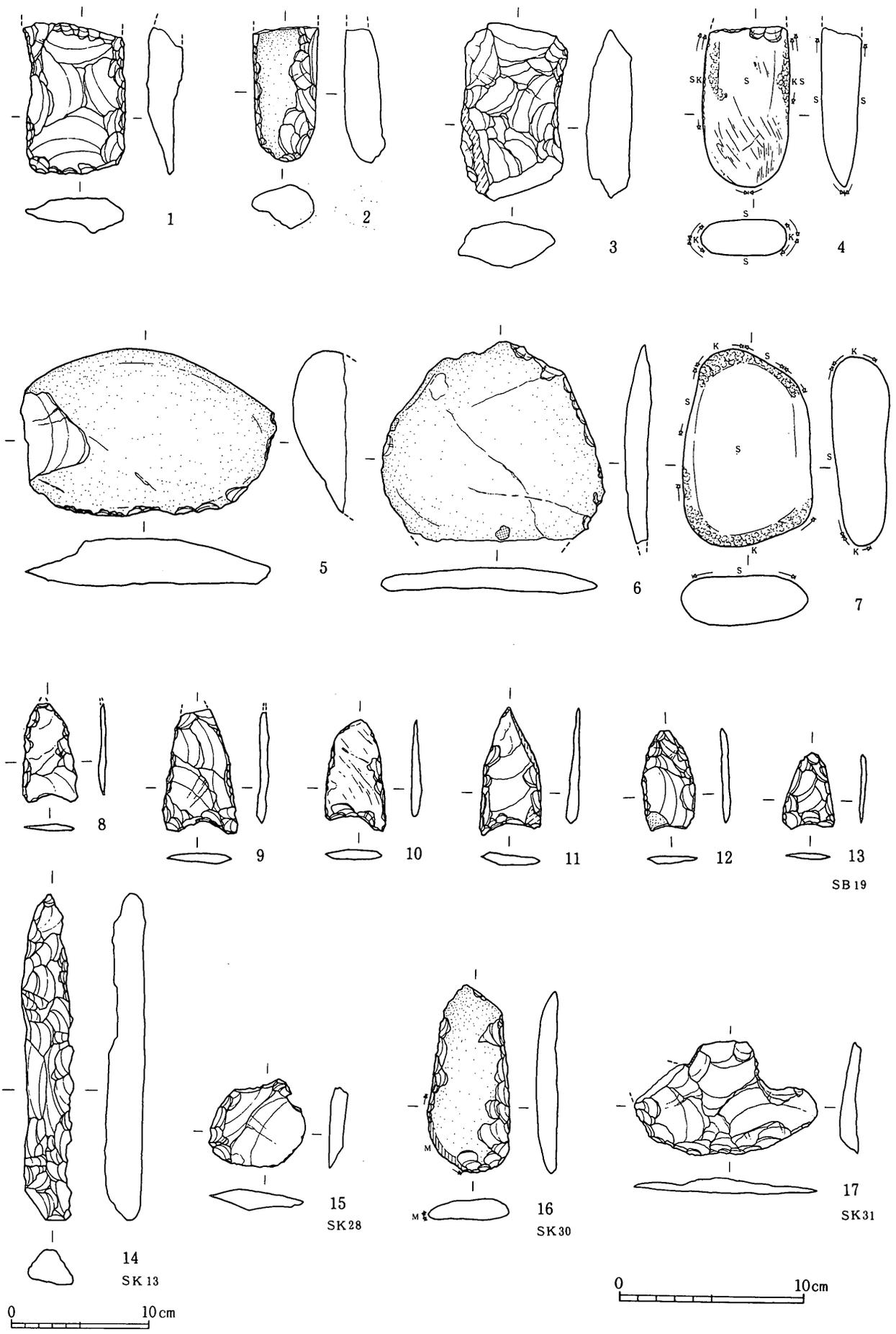


插图18 SB·SK出土石器

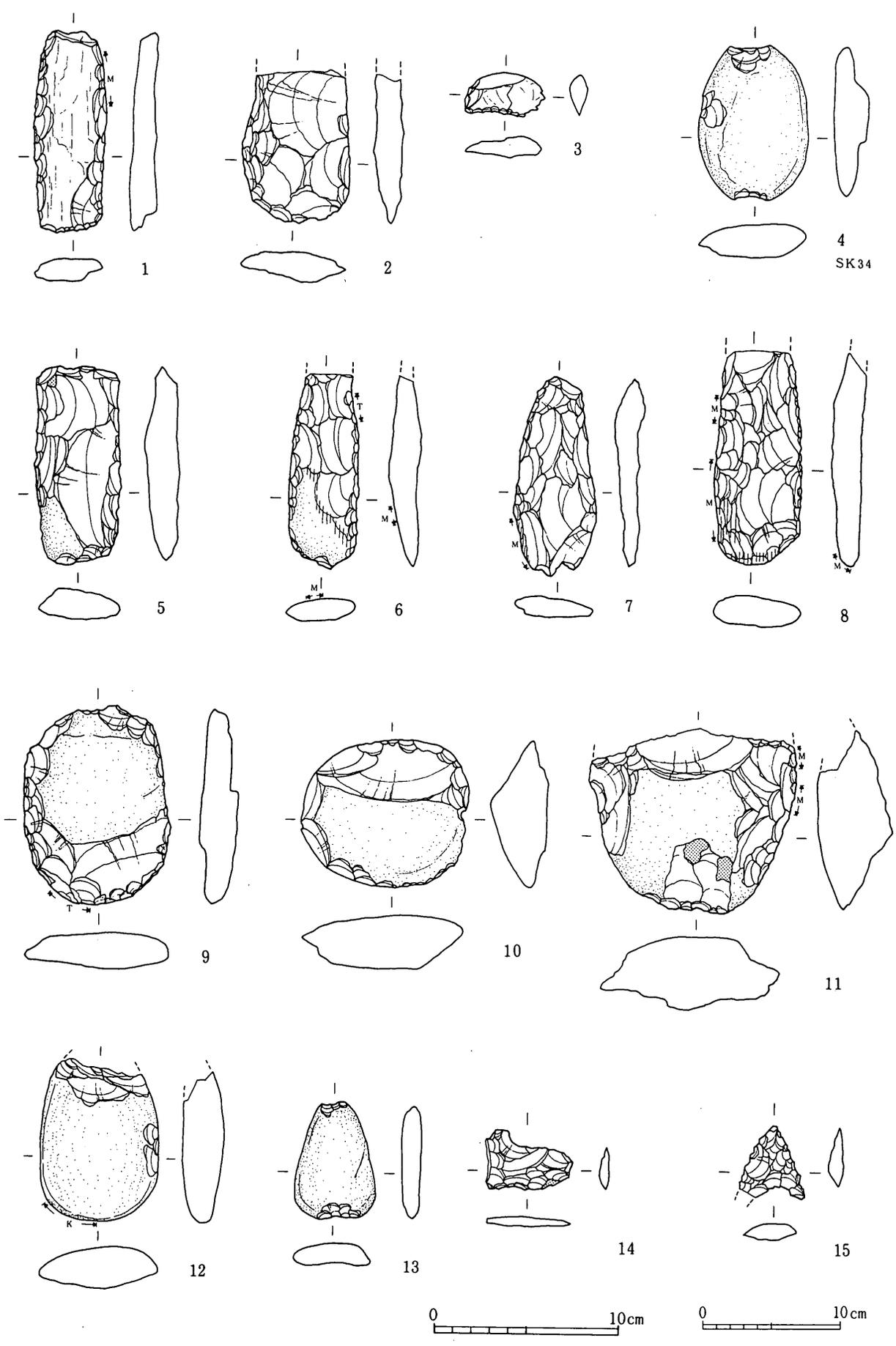


插图19 SK·遺構外出土石器

第IV章 総括

今回の調査は、鉄塔建設及び工事用道路建設予定地という極狭い範囲に限られたもので、遺跡全体からすれば、そのごく一部に試掘坑をあけた程度のもと言える。その調査結果は、本文中に記したとおりであり、隣接する平成7年度調査地点の成果と合わせ、本遺跡の実態に深く迫るものとなった。特に、平成7年度調査は、縄文時代早期から前期を中心に遺構・遺物が確認されたが、今次調査では中期初頭を中心に弥生時代後期の住居址が確認され、遺跡の占地の状況がより明確になったと言える。また、縄文時代中期初頭の土器群は、近年資料数が増加し、その実態がようやく判明しつつある。こうした点に注目し、調査成果の到達点と課題について時代毎の概要を記して、今次調査の総括としたい。

第1節. 縄文土器の概要

(1) 押型文土器

今次調査地点では総計5点の押型文土器が確認されている。いずれも破片資料で器形のわかるものはない。挿図14-24は条数・単位数不明だが、山形文を横位に帯状施文する。器壁は約5mmと薄く、細かい長石粒・雲母片を含み、色調は褐灰色を呈する。挿図14-26は、3条2単位の山形文を縦位に帯状施文する。器壁は約5mmと薄く、長石・石英粒を含み、色調は浅黄橙色を呈する。挿図17-5は条数・単位数不明だが、山形文を横位に密接施文する。器壁は約10mmで、細かい長石粒を多量に含む。挿図17-6は条数・単位数不明だが、山形文を縦位に密接施文している。大粒の長石粒を多量に含む、色調は灰色から灰白色を呈する。挿図17-14は簾状の長方形格子目文が施された土器。長石粒を多量に含みがさついた感じがする土器である。

以上押型文土器を概観したが、挿図14-24・26、挿図17-5は、平成7年度調査資料の土器群に酷似する。平成7年度資料には、胎土に黒鉛を含むものも見られ、「沢式土器」に類似するものの、施文原体および施文技法の特徴は「立野式土器」と共通しており、両者の中間的な様相を持つ土器群として報告されている(飯田市教委 1997)。今次調査地点の土器群も同様な位置付けされよう。一方、挿図17-6・14は、器壁も厚く胎土に長石粒を多量に含む、全体的にがさついた感じのする土器群で、施文原体・技法などから立野式に位置づけられよう。

(2) 捺糸文土器

今次調査地点からは総計4点の捺糸文土器が確認されている(挿図15-26、挿図17-7・8・11)。いずれも一段の捺糸Rを用いており、細い条を用いている。器壁は約5mmと薄く、胎土に細かい長石粒をふくむ。色調は灰色～灰白色を呈し、前述の押型文土器に類似している。こうした特徴から押型文土器に並行あるいは組成の一部となる捺糸文土器と考えられる。平成7年度調査地点からも同様な胎土・原体の土器が出土している。

(3) 前期末葉から中期初頭の土器

黒田大明神原遺跡からは前期後半から中期初頭の土器群が数多く出土している。いずれもSKからの

出土である。なかでもSK27・28・31・34からは良好な資料が出土している。各遺構毎に様相を観察してみたい。

SK27 (挿図14) 薄手の縄文施文土器 (1～8) を主体とし、半截竹管による半隆起線文上をヘラ切りする晴ヶ峰式 (11・12)、北白川下層III式 (10) が出土している。

SK28 (挿図14) 半截竹管による半隆起線および半隆起線上をヘラ切りする晴ヶ峰式 (17～23)、指頭状圧痕が施された隆帯を持つ晴ヶ峰式 (15) が主体となる。

SK31 (挿図15) 口縁部に結節浮線文を貼付する関西系の土器 (1・2・5・6)、口唇部に粘土紐を貼付し肥厚させ、内外面に縄文施文する大歳山式 (7)、半隆起線文を主文様とする晴ヶ峰式 (9・10・19・20) および縄文施文の土器群が出土している。

SK32 (挿図15) 21～24は同一個体の口縁部である。波状口縁の口唇部に粘土帯を貼付し肥厚させ、口唇部には半截竹管の先端部による刺突が施される。口縁部内面には楕円形の刺突が千鳥に数段施される。器壁は薄く、全体に白っぽい色調をしており、関西系の土器と考えられる。

SK34 (挿図16・17) 半截竹管状工具による沈線文を主文様とする土器群を主体とする。1は、底部を欠くものの、口頸部を境に口縁部が外反し、その上端で「く」の字状に内側に折れる器形で、頸部および胴下半部には沈線文間に縄文が施文されている。2は口縁部を欠く胴部のみであるが、横位の沈線で上下に区画された胴部に、半截竹管状工具による沈線文を密接施文している。胴部上半は沈線で格子状に施文し、その上に対弧状のモチーフを描いている。3は肥厚させた口縁部に瓦状押引文を施す土器。この他に、13～15のような半截竹管状工具により幾何学文内に格子状の沈線を充填するもの、波状口縁の口縁部に三角印刻文をほどこすもの (9)、刺突列点文が施された晴ヶ峰式 (11・12・22)、東海系の北裏CI式と考えられる土器 (8)、及び有孔鏝付土器?のミニチュア土器 (挿図16-4) 等みられる。

各土坑出土の遺物の概要をみると、縄文前期終末期の土坑 (SK27・28・31・32) からは在地系の晴ヶ峰式・関西系の北白川下層式・大歳山式が混在して出土する様相がうかがえる。これは平成7年度調査時のSB10と同様であり、飯伊地方の当該期の状況が極めて関西的であることをよく示している。一方、中期初頭と考えられるSK34では、五領ヶ台式土器の沈線文系土器を主体とし、少量の前期終末土器を伴っている。飯伊地区では飯田市富の平遺跡・殿原遺跡・直刀原遺跡・増田遺跡・大門原遺跡・大久保遺跡、喬木村伊久間原遺跡・地神遺跡などで土坑・住居址が確認されており、資料が増加している。この飯伊地区の当該期を概観すると、沈線文系の土器群が主体となり、縄文系は極端に少ない傾向にある。また、東海的な土器も少なからず存在する。こうした点から中期初頭には在地色が強まり、東海地方との関係が強くなると推定される。

第2節 SB19出土磨製石鏃未製品について

弥生時代の遺構としてSB19がある。浅い地床炉を持ち、遺物量は極めて少ないものの、磨製石鏃の未製品6点及び砥石・叩き石の出土が異色といえる。飯田市座光寺恒川遺跡群では弥生時代中期後半に多く出土しており、その多くが未製品であり、完成品の出土は少なく、基部のみの破損品が多いことから集落外での使用、集落内での製造・装着が指摘されている(飯田市教委 1986)。SB19の磨製石鏃未製品は粘板岩あるいは緑色片岩を使用している。磨製石鏃の製作工程は、神村透氏の研究があり、前述の報告書でも詳細に述べられている。ここではそれに乗っ取り説明する。SB19出土資料には「I 粗割」段階の資料は含まれず、「II 剝離調整」段階が5点(挿図18-8・9・11・12・13)、「III 研磨 i。片面研磨」段階が1点(10)であり、その後の工程の資料は出土していない。恒川遺跡群では剝離調整段階で、基部の抉りを入れるものが少なく、研磨段階の側面研磨時に抉りを施す例が多い。一方、SB19出土資料はその全てに剝離調整段階での基部の抉りが行われると同時にこの段階までに厚さを薄くしているのが特徴である。こうした差違の原因は、天竜川上位段丘面の資料の増加により解明されると期待される。

第3節 縄文時代の遺構について

前述してきたとおり、縄文前期終末から中期初頭の土坑群が確認されている。当該期の土坑は南側調査区を中心に確認されている。土坑の性格として注目されるものにSK34があげられる。SK34では覆土中から大量の炭化物・焼土・土器片・加熱を受けた黒曜石片など多くの遺物が出土しており、土器焼成遺構的な性格が推定される。またSK31は、掘り込みが2段になっており、平成7年度調査地点の建物址の柱穴に形態が類似している。こうした点から今次調査地点周辺にも大型建物址が存在すると思われる。今次調査では縄文時代の住居址は確認されなかったが、隣接する7年度調査地点からは前期末から中期初頭の住居址が確認されており、その北側に当該期の土坑・建物址が配置されることが推定されている。今次調査の成果はこの推察を裏付ける成果といえる。おそらく調査区南側の窪地(河川址)に面した箇所に集落が形成され、今次調査区周辺には集落に付属する諸施設が形成されていたと考えられよう。

黒田大明神原遺跡の調査で得られた成果・問題点の幾つかを整理した。本遺跡は、県道バイパス工事により遺跡中央部が分断されたものの、現状で大部分が残っている。しかし、道路の開通により周辺の開発に拍車がかかるものと思われ、遺跡の破壊は必至であろう。今後、残された部分の保護には十分の注意を払う必要があり、今まで以上の地道な文化財保護の本旨に沿ったたゆまぬ努力が必要である。

参考文献

- | | | |
|----------|------|-------------|
| 飯田市教委 | 1986 | 『恒川遺跡群』 遺物編 |
| 飯田市教委 | 1996 | 『富の平遺跡』 |
| 縄文セミナーの会 | 1995 | 『中期初頭の諸様相』 |

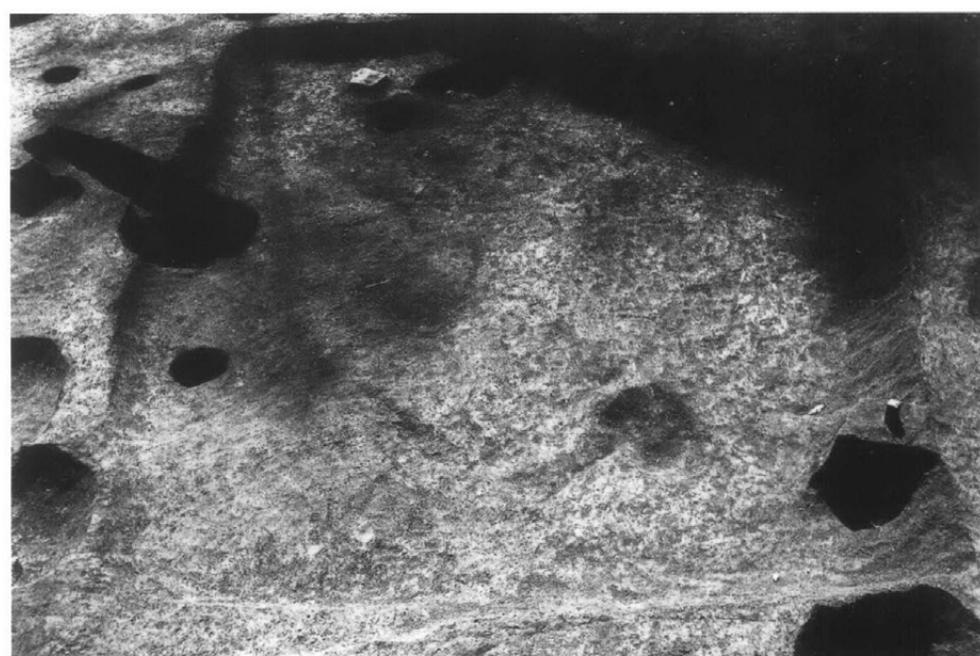
写真図版



調査前



調査区全景



SB01



SI32



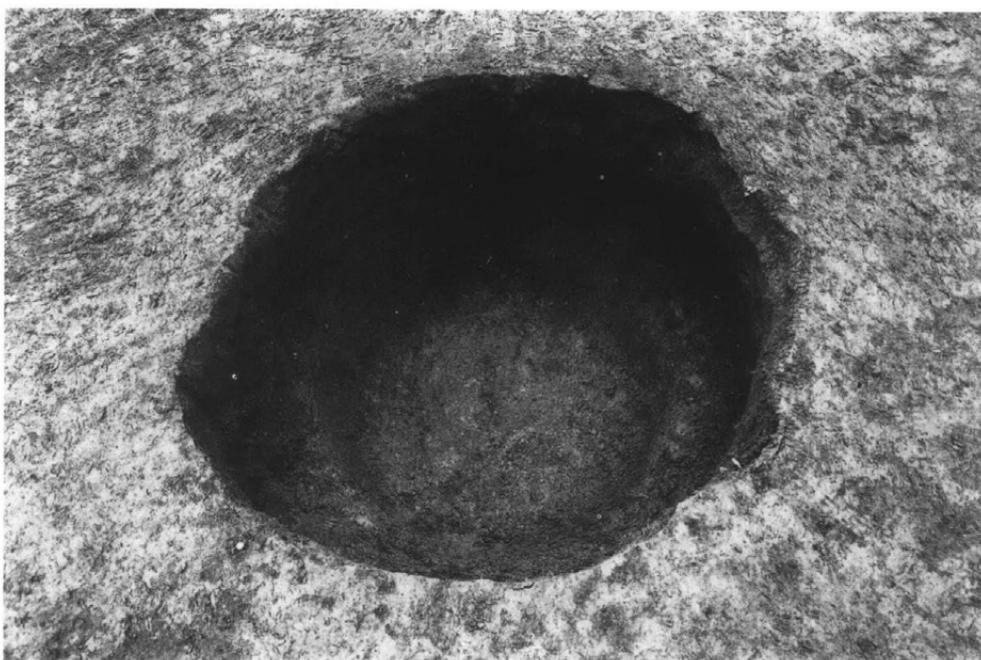
SI33



SI34



SK27



SK34



SK34遺物出土状況



調査区近景 (1)



調査区近景 (2)



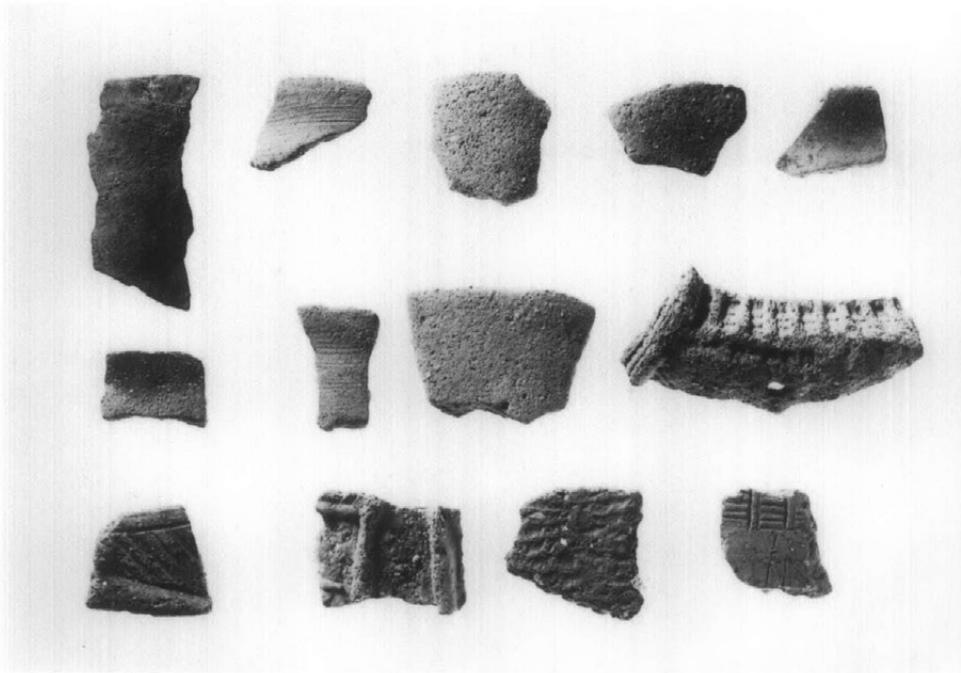
重機作業風景



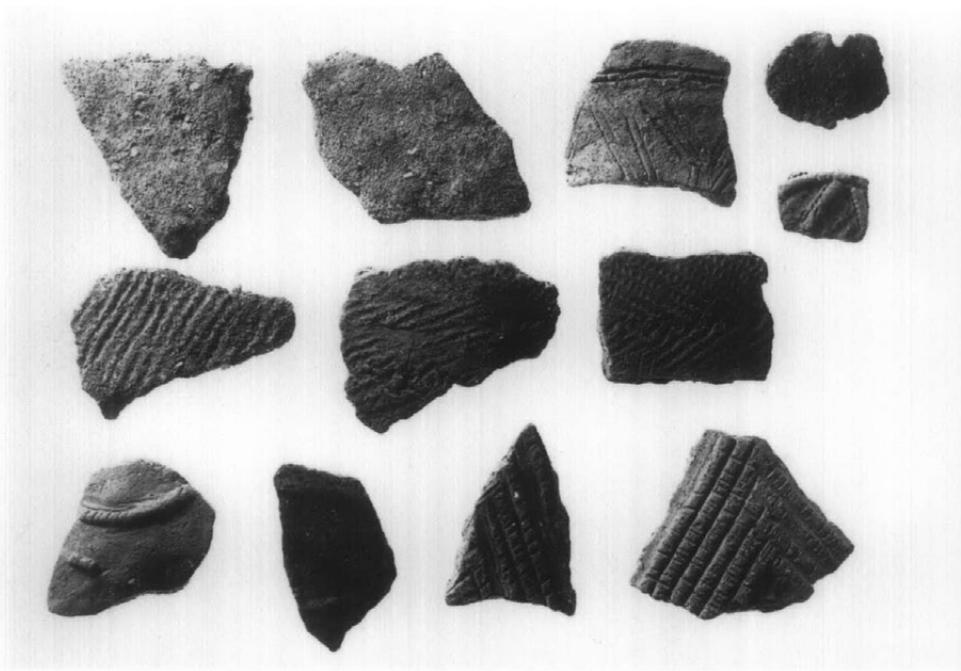
作業風景



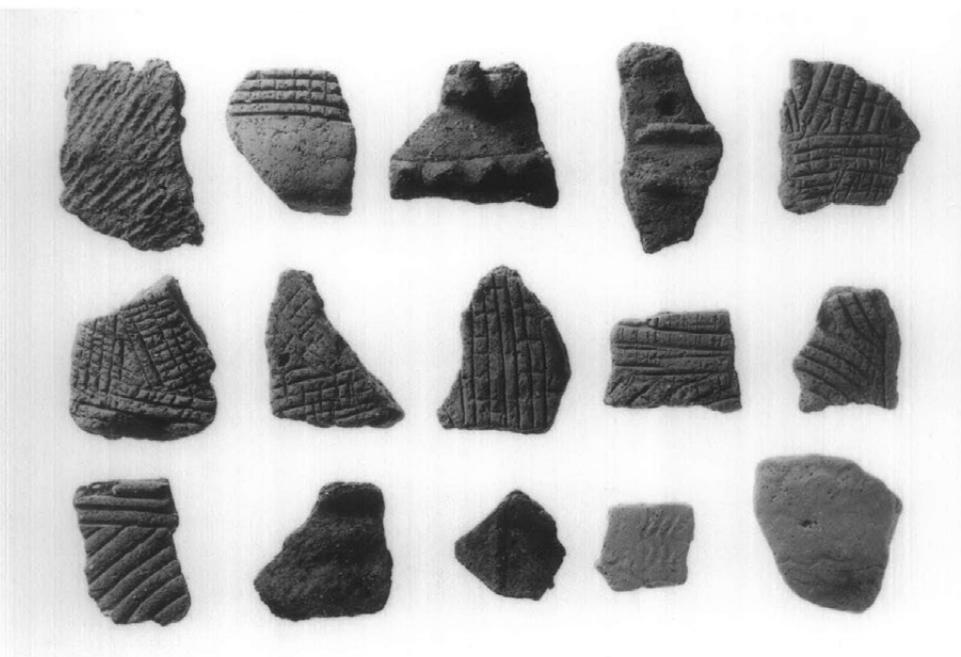
委託写真撮影風景



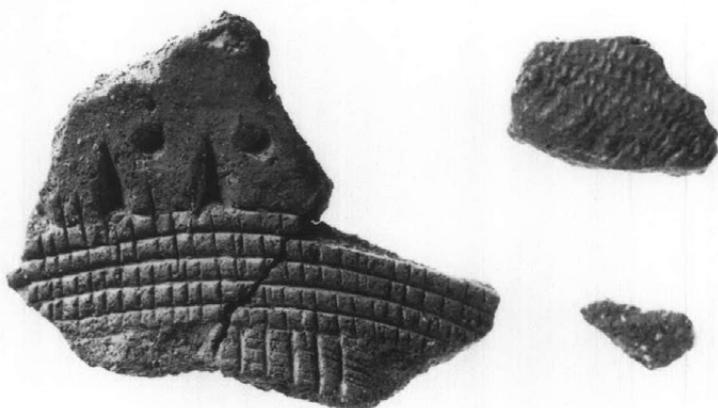
SB19出土土器



SK27出土土器



SK28出土土器



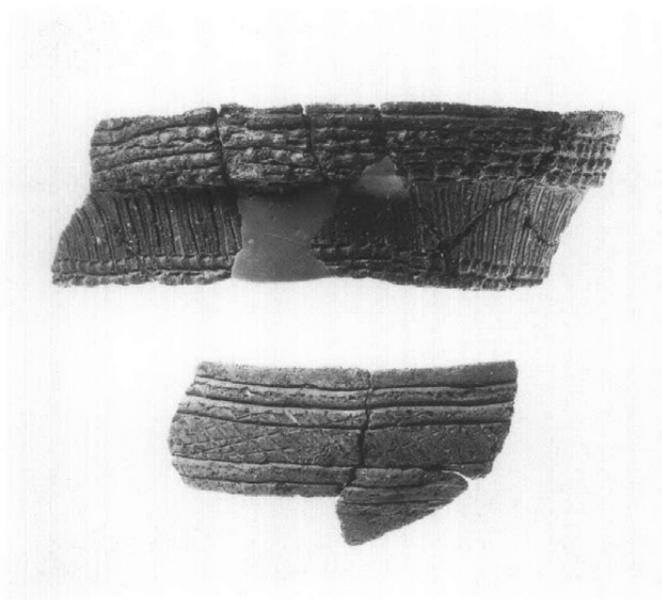
SK29出土土器



SK31出土土器



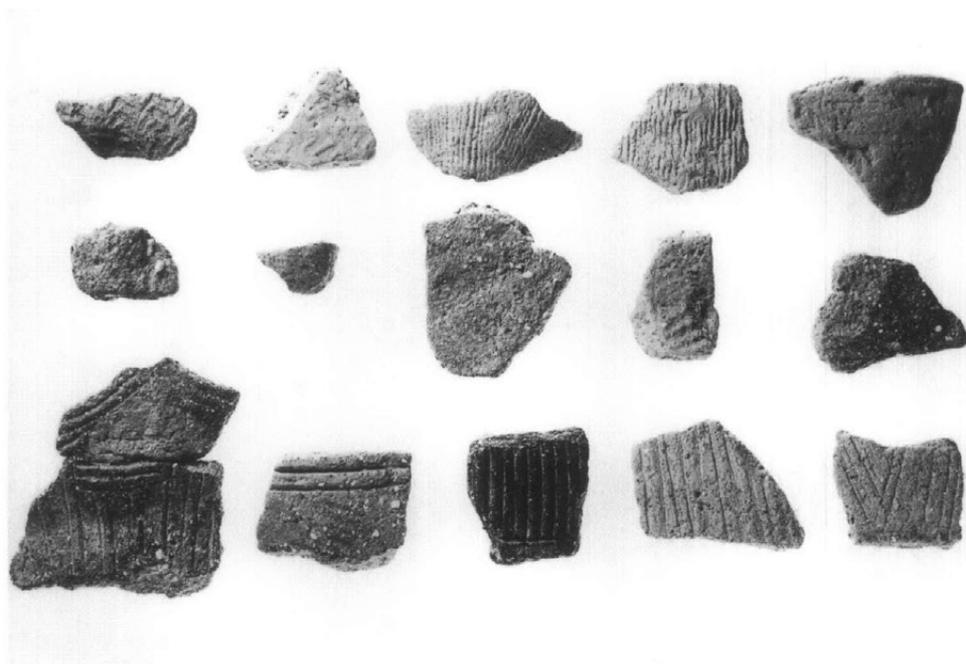
SK31出土土器



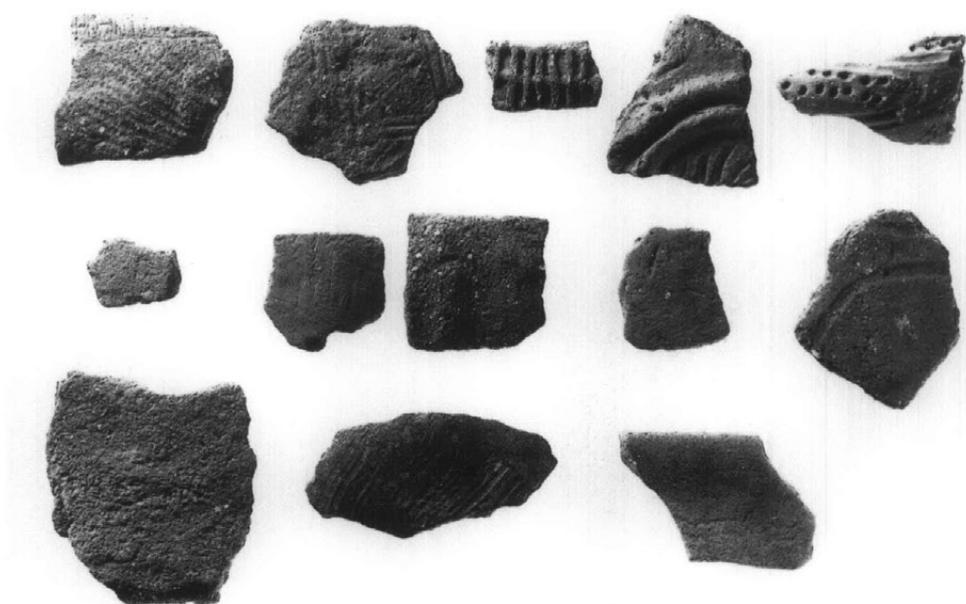
SK34出土土器



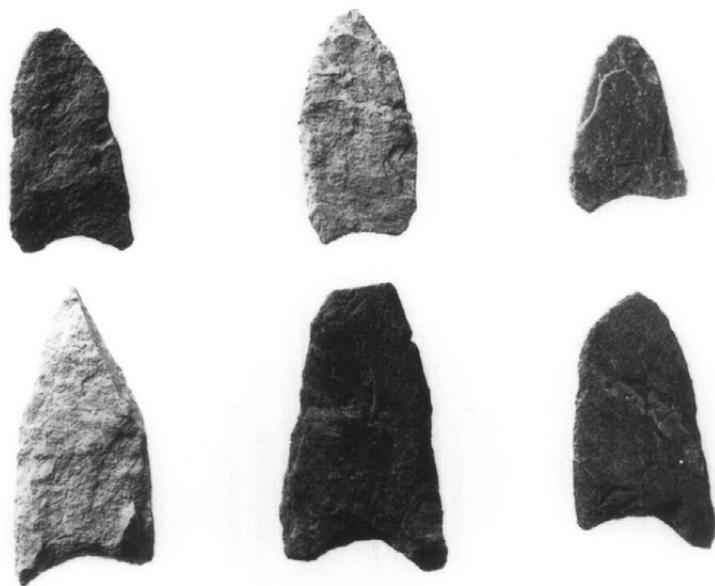
SK33出土土器



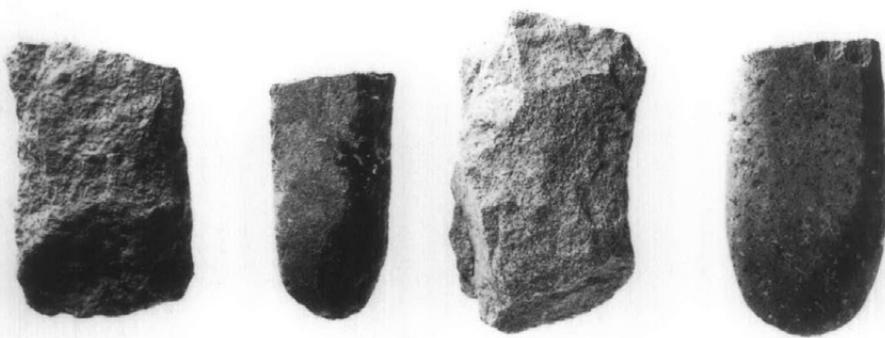
遺構外出土土器



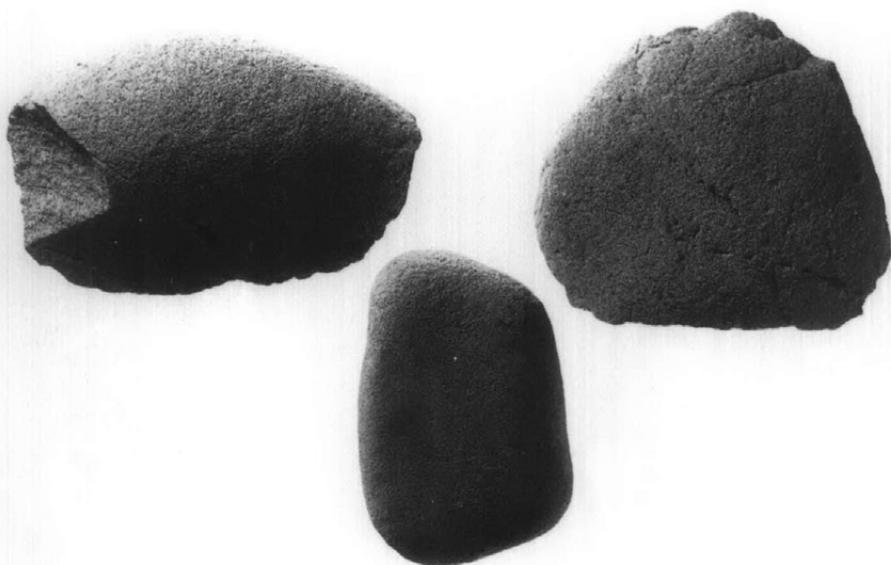
遺構外出土土器



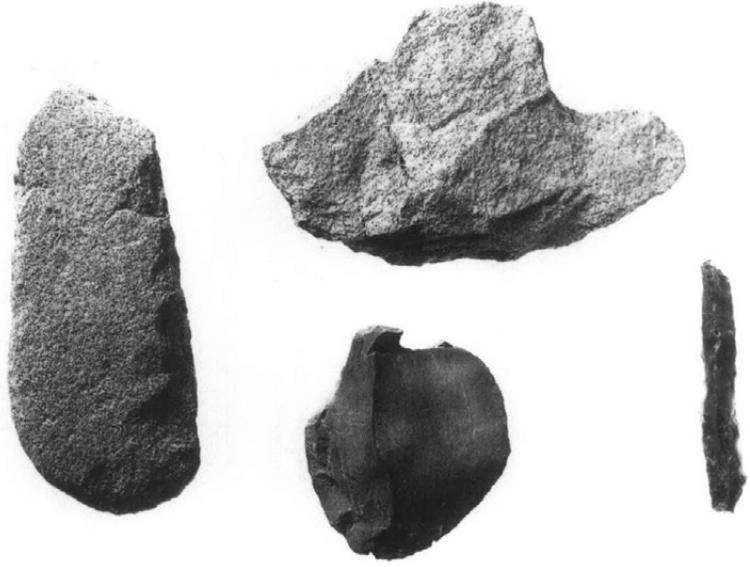
SB19出土石器 (1)



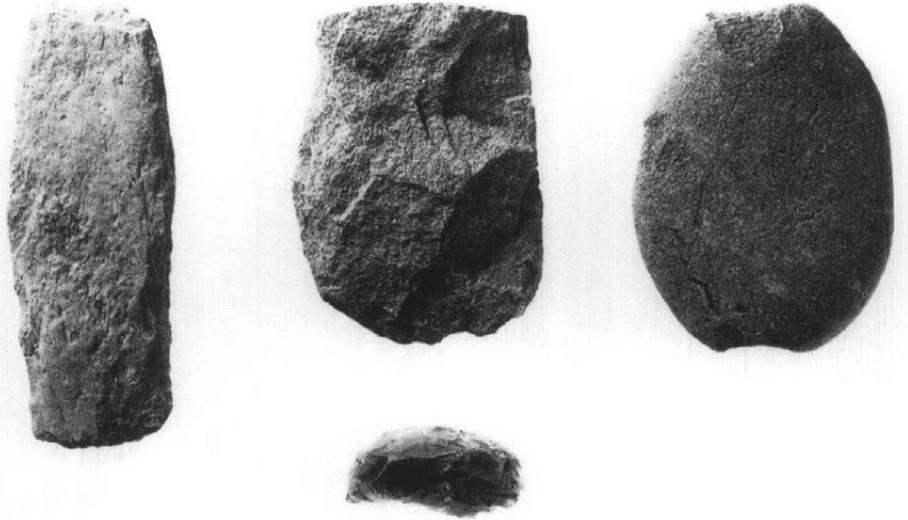
SB19出土石器 (2)



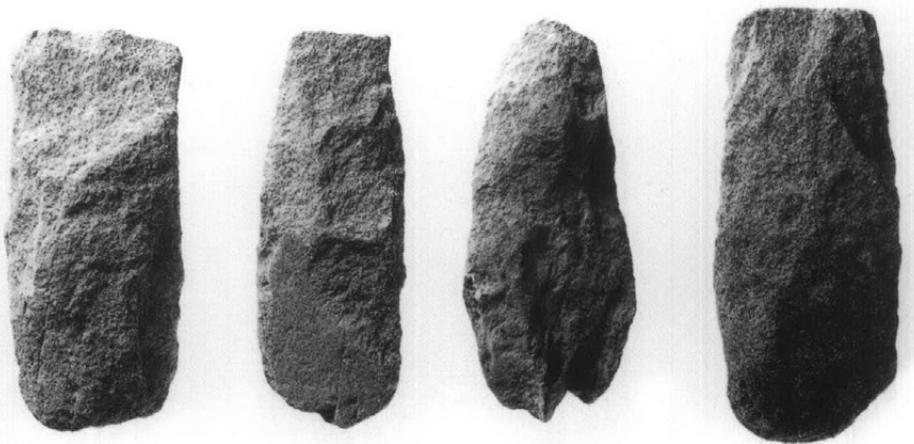
SB19出土石器 (3)



SK出土石器



SK34出土石器



遺構外出土石器

報告書抄録

ふりがな	くろだだいみょうじんばらいせき						
書名	黒田大明神原遺跡III						
副書名							
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	下平博行						
編集機関	長野県飯田市教育委員会						
所在地	〒395-0002 長野県飯田市上郷飯沼3145番地 ☎0265-53-4545						
発行年月日	西暦2000年3月20日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 名所在地	コード 市町村遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
くろだだいみょうじんばら 黒田大明神原	いいだしかみ さとくろだ 飯田市上郷黒田		35度 32分 36秒	137度 50分 36秒	19990225 ～ 19990326	370m ²	中部電力 送電線鉄 塔建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
黒田大明神原遺跡	集落址	縄文時代 弥生時代	土坑 8基 集石 6基 竪穴住居址 1軒	前期終末から中期初頭の土器群 磨製石鏃未製品 6個	前期終末から中期初頭の五領ヶ台式（沈線文系）の一括資料		

黒田大明神原遺跡Ⅲ

2000年3月 発行

編集・発行 長野県飯田市上郷飯沼3145番地
飯田市教育委員会
印刷 飯田共同印刷(株)

